



2019

国立大学法人 茨城大学
農学部研究者紹介

ごあいさつ

茨城大学農学部は教員数約60名、技術職員8名で構成され、専門分野は生命科学、食品、土木、環境など多岐にわたっております。各分野の先端技術の研究開発を担う高度な実験機器も多数保有し、活発な教育研究活動を行っています。2017年度から「21世紀社会の持続的発展を推進する実務型農学系人材」を育成するため、農学部は2学科4コース制、大学院農学研究科は1専攻4コース制による新たな教育課程に生まれ変わりました。本学農学部は地域の農業の課題に向き合い、産業界と連携しながら地域振興や人材育成の拠点として貢献することを目標としています。2018年度から附属フィールドサイエンス教育研究センターは「国際フィールド農学センター」に改組、2018年12月10日付けでJGAP認証を取得し、教育・研究の充実を目指します。

また、2019年度にはHACCP(ハサップ)の教育・実習や企業との共同研究が可能なフードイノベーション棟が完成し、充実した教育研究環境の整備が進められました。

さて、2017年度の農学部改組を契機として、従来の専門分野にとらわれない新たな価値の創出を目指した研究が始まりつつあります。そこで、これまで以上に皆様との連携の活動が拡充・進展することを期待し、教員の活動の概略をまとめた『茨城大学農学部研究者紹介』を作成しました。この「研究者紹介」が大いに活用され、地域のニーズとのマッチングによる共同研究等が活性化するとともに、これまでの教育研究や社会貢献活動を通じて培ってきた専門的知見が、地域の抱える課題の解決や新たな産業の創出に活かされれば幸いです。

茨城大学農学部は多くの皆様との出会いを願っております。皆様からのご連絡やご相談を心からお待ちしています。

2019年6月

国立大学法人茨城大学
農学部長 戸嶋浩明

Hiroaki Toshima



農学部研究棟



農学部フードイノベーション棟

目次

食品科学

上妻由章	・・・	1
白岩雅和	・・・	2
鈴木穂高	・・・	2
中村彰宏	・・・	3
鎗田孝	・・・	3
宮口右二	・・・	4
豊田淳	・・・	4

畜産科学

上塚浩司	・・・	5
小川恭喜	・・・	6
大久保武	・・・	6
金澤卓弥	・・・	7
小針大助	・・・	7
須藤まどか	・・・	8
中島弘美	・・・	8
安江健	・・・	9

バイオテクノロジー

朝山宗彦	・・・	10
中平洋一	・・・	11
久留主泰朗	・・・	11
西原宏史	・・・	12
長南茂	・・・	12
小島俊雄	・・・	13
安西弘行	・・・	13

微生物の利用と制御

成澤才彦	・・・	14
西澤智康	・・・	15
古谷綾子	・・・	15
中島雅己	・・・	16

化学物質と生物制御

鈴木義人	・・・	17
長谷川守文	・・・	18
戸嶋浩明	・・・	18
菊田真吾	・・・	19
北嶋康樹	・・・	19

農業生産科学

佐藤達雄	・・・	20
望月佑哉	・・・	21
井上栄一	・・・	21
田附明夫	・・・	22
久保山勉	・・・	22
浅木直美	・・・	23
七夕小百合	・・・	23
小松崎将一	・・・	24

環境・工学

岡山毅	・・・	25
黒田久雄	・・・	26
吉田貢士	・・・	26
前田滋哉	・・・	27
毛利栄征	・・・	27
西脇淳子	・・・	28
坂上伸生	・・・	28

農業情報科学

木下嗣基	・・・	29
増富祐司	・・・	30

農業経済・地域創生

池田真也	・・・	31
伊丹一浩	・・・	32
内田晋	・・・	32
小林久	・・・	33
中川光弘	・・・	33
長澤淳	・・・	34
西川邦夫	・・・	34
福与徳文	・・・	35
牧山正男	・・・	35
高瀬唯	・・・	36

学科索引

食生命科学科

朝山宗彦	・・・	10
上塚浩司	・・・	5
大久保武	・・・	6
小川恭喜	・・・	6
金澤卓弥	・・・	7
久留主泰朗	・・・	11
上妻由章	・・・	1
小島俊雄	・・・	13
小針大助	・・・	7
白岩雅和	・・・	2
坂上伸生	・・・	28
鈴木穂高	・・・	2
鈴木義人	・・・	17
須藤まどか	・・・	8
長南茂	・・・	12
戸嶋浩明	・・・	18
豊田淳	・・・	4
中島弘美	・・・	8
中平洋一	・・・	11
中村彰宏	・・・	3
成澤才彦	・・・	14
西澤智康	・・・	15
西原宏史	・・・	12
長谷川守文	・・・	18
宮口右二	・・・	4
安江健	・・・	9
鎗田孝	・・・	3

遺伝子実験施設

安西弘行	・・・	13
古谷綾子	・・・	15

地域総合農学科 (農業科学コース)

浅木直美	・・・	23
井上栄一	・・・	21
菊田真吾	・・・	19
北嶋康樹	・・・	19
久保山勉	・・・	22
佐藤達雄	・・・	20
田附明夫	・・・	22
七夕小百合	・・・	23
中島雅己	・・・	16
望月佑哉	・・・	21

地域総合農学科 (地域共生コース)

池田真也	・・・	31
伊丹一浩	・・・	32
内田晋	・・・	32
岡山毅	・・・	25
木下嗣基	・・・	29
黒田久雄	・・・	26
小林久	・・・	33
小松崎将一	・・・	24
高瀬唯	・・・	36
中川光弘	・・・	33
長澤淳	・・・	34
西川邦夫	・・・	34
西脇淳子	・・・	28
福与徳文	・・・	35
前田滋哉	・・・	27
牧山正男	・・・	35
増富祐司	・・・	30
毛利栄征	・・・	27
吉田貢士	・・・	26

食品科学

上妻 由章(教授)

Kouzuma Yoshiaki

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 413号室

yoshiaki.kouzuma.98(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8682 FAX: 029 (888) 8682

URL: <http://foodfunc.agr.ibaraki.ac.jp>



研究内容キーワード: 生理活性蛋白質、レクチン、プロテアーゼインヒビター

研究の概要

(1) 食品素材中の機能性物質の分離・同定、機能解明に関する研究

食品素材中には、生体調節機能(生理活性)を発揮するようなタンパク質、ペプチドなどが存在します。例えば、ガン細胞の増殖を抑えるようなタンパク質や血圧低下作用、抗酸化作用があるペプチドなどが知られています。私たちは様々な食品素材からそのような機能性物質を探索して、その構造や機能の解明を行っています。これまでローヤルゼリーやハスの実、キノコ類(ハナヒラタケ、ヤマブシタケ、シイタケ)などから、多くの生理活性タンパク質や機能性物質の分離を行っており、現在は主に、食用イモの**アピオス**、ハチノコなどの食品素材から、機能性物質の探索を試みています。

(2) 生理活性タンパク質の医学分野等への応用に関する研究

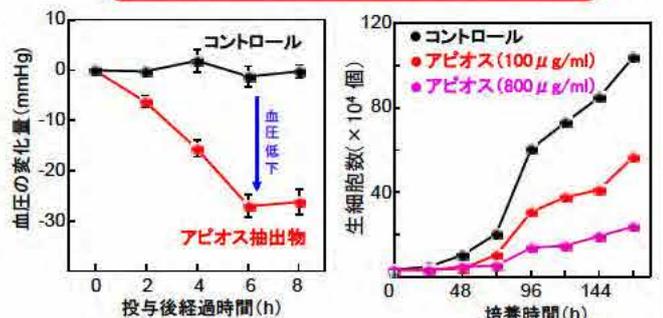
私たちは、発見された生理活性タンパク質などについて、食品分野への応用が難しいものについては、医学分野や生化学分野に応用するための研究も行っています。例えば、**グミ**というナマコから発見されたレクチン(糖結合性タンパク質)をガン細胞特異的に傷害を行う機能性分子として応用しようとする研究や、昆虫に存在するプロテアーゼインヒビター(タンパク質分解酵素阻害剤)の抗ウイルス活性を利用しようとする研究などを行っています。

主な所属学会: 日本農芸化学会、日本蛋白質科学会



抽出、探索

生体調節機能性物質
(タンパク質、ペプチド、他)



高血圧自然発症ラットへの
アピオス抽出物投与後の血圧変化

アピオス抽出物によるガン
細胞の増殖抑制効果

白岩 雅和(教授)

Shiraiwa Masakazu

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 410号室

masakazu.shiraiwa.0701(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8680 FAX: 029 (888) 8680



研究内容キーワード:大豆、菊芋、サポニン、生理活性成分、生活習慣病

研究の概要

食品には「栄養機能」「感覚機能」「生体調節機能」という3つの機能があり、この3つの機能がすべて高い食品があれば理想的です。そこで本研究室では、栄養価が高く、将来の人口増加に伴う食糧難に対処できる重要な食料資源と言われている**大豆**と糖尿病緩和作用を有するイヌリンを多量に含むことで有名な**菊芋**に注目し、それらに含まれる生理活性成分の探索・同定とそれらの成分の示す生理活性の作用メカニズムの解明を行っています。さらにそれらの成分の組成や含量を人為的にコントロールし、**美味しく健康に良い食品を開発**することによって、**生活習慣病の予防**に貢献することを目指しています。

- 大豆サポニンの抗がん活性、抗炎症活性、抗肥満活性に関する研究
- 大豆サポニン生合成の人為的コントロールによる高機能大豆の開発
- 菊芋成分の抗がん活性、抗炎症活性、抗酸化活性に関する研究

主な所属学会:日本農芸化学会、日本食品科学工学会



大豆種子



菊芋の塊茎

菊芋の葉

研究

・生理活性成分(健康に良い成分や美味しくない成分など)の探索・同定
 ・作用メカニズムの解明
 ・生理活性成分の組成と含量の人為的制御

開発

大豆製品
菊芋製品



生活習慣病の予防

提供

鈴木 穂高(准教授)

Suzuki Hodaka

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 522号室

hodaka.suzuki.food(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8572 FAX: 029 (888) 8572

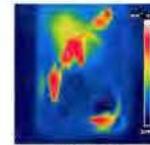


研究内容キーワード:食中毒、魚貝毒、食中毒菌、実験動物

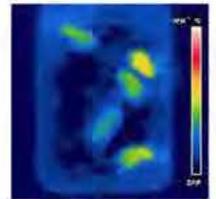
研究の概要

食品衛生上の問題となる微生物、毒素等の検出・同定、および感染・毒性発現メカニズムの解明を目指しています。

下痢性貝毒投与によるマウスの著しい体温低下



対照群



投与群

研究タイトル

- ・フグ毒のマウス・バイオアッセイの研究
- ・下痢性貝毒の毒性メカニズムの研究
- ・シガテラ毒の毒性評価に関する研究

マウスの系統によるフグ毒感受性の差

フグ毒に低感受性のマウス系統

フグ毒に高感受性のマウス系統



ddY



ICR



BALB/c



A/J



C3H/He



C57BL/6



DBA/2

主な所属学会:日本獣医学会、日本実験動物学会、日本食品衛生学会

中村 彰宏(教授)

Nakamura Akihiro

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部フードイノベーション棟 306号室

akihiro.nakamura.daru(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8683 FAX: 029 (888) 8683



研究内容キーワード: 食品加工、保蔵、多糖類、分散、乳化、構造

研究の概要

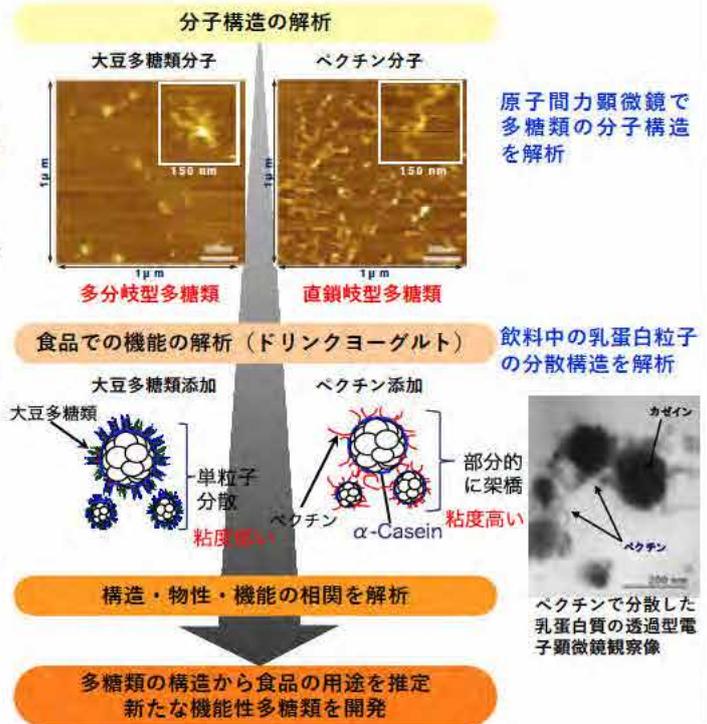
当研究室では、食品の製造、流通、保存のプロセスで生じる成分変化とその要因を科学的に解析し、安全、安心、高品質な食品の開発に繋がる研究を進めています。

特に、食品の加工性の向上と品質保持に不可欠な”多糖類”に注目して研究しています。植物多糖類を中心に、分子構造の解析、物性の解析、食品における機能の解析を行い、多糖類データベースの構築と新たな機能性多糖類の開発にも取り組んでいます。

【主な研究テーマ】

- ・多糖類によるドリンクヨーグルトの安定化機構の解析
- ・多糖類が持つ乳化機能と機構の解析
- ・原子間力顕微鏡による多糖類の構造解析と食品の微細構造の解析
- ・酵素による多糖類の構造改変と新機能の創出

主な所属学会: 日本農芸化学会、日本食品科学工学会



鎗田 孝(准教授)

Yarita Takashi

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 412号室

takashi.yarita.fsa(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8681 FAX: 029 (888) 8681



研究内容キーワード: 食品分析、食品残留物質、分析精度管理、クロマトグラフィー

研究の概要

食品中の残留物質などの分析では、円滑な流通を確保しながら正しい分析値を得ることが必要です。そこで、“より迅速”、“より正確”、“より安全”な分析方法を開発し、食の安全・安心の向上に貢献します。

①食品分析の迅速化

簡易な試料抽出法やクリーンアップ法を開発し、煩雑で長時間を要する食品分析を迅速化しています。

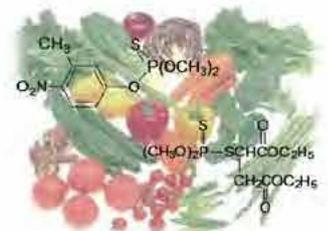
②食品分析の正確化

いつでもだれでも正しい分析値が得られるように、食品分析の分析精度の向上に取り組んでいます。得られる分析値の正確さの評価にも取り組んでいます。

③食品分析のグリーン化

有機溶媒の代わりに高温高圧水を活用して、環境や分析者に優しく安価な食品分析法の開発に取り組んでいます。

主な所属学会: 日本分析化学会、日本食品衛生学会



新しい食品分析法の開発に取り組んでいます



高温高圧水を利用した高速液体クロマトグラフ

宮口 右二(教授)

Miyaguchi Yuji

茨城大学食生命科学科

連絡先

農学部フードイノベーション棟 307号室
yuji.miyaguchi.meat(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8580 FAX: 029 (888) 8580
URL: <http://animal.agr.ibaraki.ac.jp/seisanbu/index.html>



研究内容キーワード: 食肉、加工、機能性、飼料化、畜産物

研究の概要

我が国で高齢化が進む昨今、高齢者の健康にとって、栄養的に優れた畜産物の摂取は大変重要とされている。一方で、環境に負荷をかけない、持続的な畜産を行う必要があるとされている。

そこで、私どもの研究室では、とくに食肉を対象として、以下のような3つの観点から研究を行っている。

1. 未利用資源の飼料化

食品残さや未利用の食資源の有効利用のため、それらの発酵処理による栄養価や機能性の向上と飼料価値を評価している。

2. 食肉の生産性および肉質評価

食肉の生産性に及ぼす飼料の影響あるいは生産された食肉の理化学的性状（テクスチャーや呈味性など）の研究を行っている。

3. 食肉加工技術の開発

安全安心な食肉製品を製造するため、従来の添加物に頼らない加工技術の開発に取り組んでいる。



主な所属学会: 日本畜産学会、日本食肉研究会、日本食品科学工学会、日本農芸化学会

豊田 淳(教授)

Toyoda Atsushi

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 624号室
atsushi.toyoda.0516(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8584 FAX: 029 (888) 8584
URL: <https://sites.google.com/site/iucafeedscience/home>



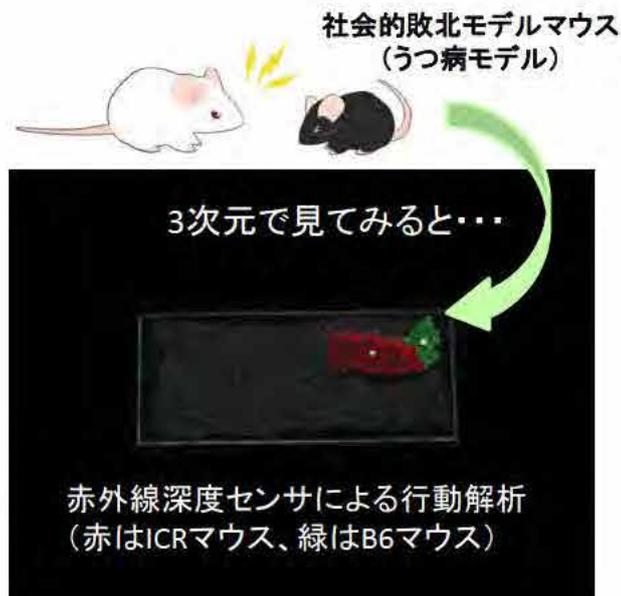
研究内容キーワード: ストレス、うつ病、行動、栄養、マウス

研究の概要

私共は、うつ病モデルマウスの行動、栄養、代謝を研究し、病態マーカーやマウスのうつ様症状を探索しています。このモデルを利用し、うつ病を予防する食品の探索も行っています。茨城大学農医連携プロジェクトに参画して農学と医学の境界領域研究を推進しています。

【研究テーマ】

- ・うつ病モデルマウスの作製と行動解析
- ・うつ病マーカーの探索(メタボローム)
- ・うつ病モデルマウスを用いた食品評価試験
- ・マウス巣作り行動の脳内神経基盤の解明
- ・深度センサによる動物行動解析装置の開発



主な所属学会: 日本畜産学会、日本神経科学会、日本栄養・食糧学会、日本農芸化学会 日本分子生物学会、Society for Neuroscience

畜産科学

上塚 浩司 (准教授)

Uetsuka Koji

茨城大学農学部食生命科学科



連絡先

農学部研究棟 520号室

koji.uetsuka.k9(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8539 FAX: なし

URL: <http://lahh.my.coocan.jp>



研究内容キーワード: *Clostridium perfringens*、ウエルシュ菌、野鳥、腸内細菌叢

研究の概要

1 生体と環境での *Clostridium perfringens* (Cp: ウエルシュ菌) の循環

Cpは芽胞形成菌であり、環境中での生残能力が高い環境細菌である。同時に、人や動物の腸内細菌の一種でもあり、かつ人で食中毒、家畜や家禽で腸炎の原因にもなる。

つまり、Cpは環境と生体の間を循環すると推察している。この循環の詳細を明らかにして、人の食中毒や、農場での家畜や家禽の腸炎の発症を予防することは出来ないだろうか？

→ そこで、留鳥、野生ネズミ、動物園動物で、ウエルシュ菌の保有状況を調べ、分離菌株の性状(毒素遺伝子の保有など)をPCRで分析し、MLST法で系統解析を行っている。



2 野鳥の糞の腸内フローラ解析を利用した環境モニタリングシステムの開発

もしも環境変化にリンクして野鳥の腸内フローラが変動するなら、環境モニタリングに応用して、早期に環境変化を予見し、生態系への影響や農業への打撃、健康被害を最小限に抑えることが出来ないだろうか？ そのような環境モニタリングシステムの開発を目指している。

→ そこでまず、野鳥の糞を新鮮な状態で種別に採取し、抽出したDNAで16S rRNAアンプリコンシーケンス解析を行い、野鳥の種別に腸内フローラのデータベースを整理している。



主な所属学会: 日本獣医学会、Wildlife Disease Association など

小川 恭喜(教授)

Ogawa Yasuki

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 625号室

yasuki.ogawa.awagokyo(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8571 FAX: 029 (888) 8525

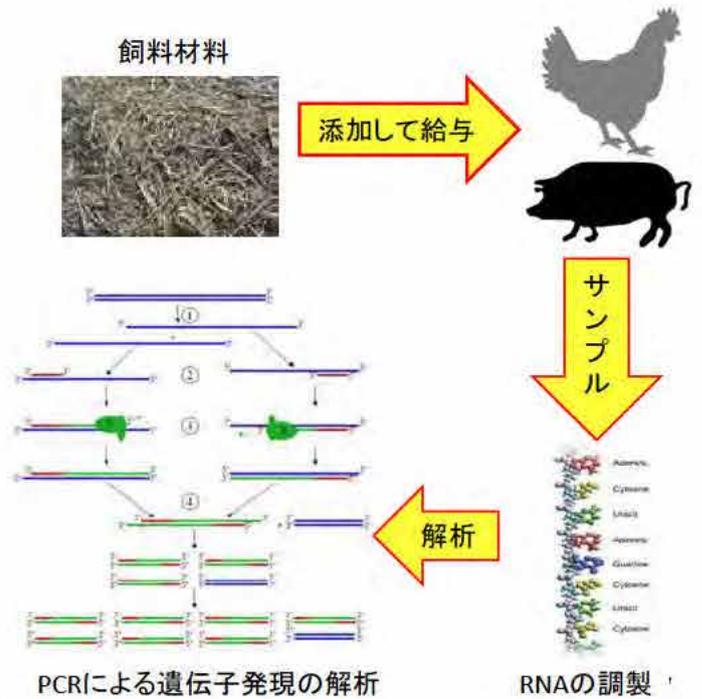


研究内容キーワード: サイトカイン、糖脂質代謝、遺伝子発現、PCR

研究の概要: 家畜飼料素材の機能性

- 健康に良好な飼料素材を家畜飼料に添加して給与し、家畜の糖脂質代謝や免疫への影響を代表的な遺伝子の発現を解析することで調べています。これら飼料素材の有用性を畜産において明らかにしようとしています。
- 飼料素材の機能性が明らかにできれば、これらを使用して家畜を飼養することで家畜の健康や畜産物の付加価値の向上につながります。

主な所属学会: 日本畜産学会、関東畜産学会、日本獣医学会



大久保 武(教授)

Ohkubo Takeshi

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 620号室

takeshi.ohkubo.0533(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8656 FAX: 029 (888) 8656

URL: <http://animalcell.agr.ibaraki.ac.jp/>



研究内容キーワード: 家禽生産、成長、生殖、ホルモン

研究の概要

ニワトリの抱卵行動制御に関する研究

鳥類は、一般的に種を保存するために、卵を温めてヒナを孵化させます。採卵用に改良されたニワトリでは、遺伝的な選抜によりこの抱卵行動が除去され、産卵能力が非常に高くなっています。一方、肉用鶏(ブロイラー)や地鶏では、抱卵による生産性の低下が懸念され、抱卵行動の除去が期待されていますが、抱卵行動を制御する遺伝子の特定には至っていません。本研究では、ニワトリの抱卵行動の発生メカニズムとその制御遺伝子の特定を進め、産卵性能の向上など、家禽産業への応用を目指しています。

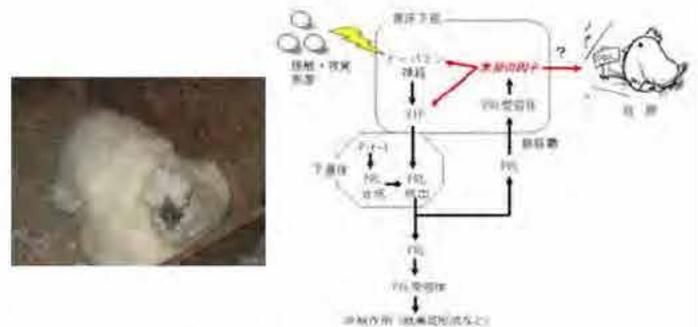


図 抱卵する鳥骨鶏(左)と抱卵制御の概略(右)

食欲調節ホルモンによる成長・生殖の制御に関する研究

動物は生命維持のエネルギーを外界から摂取します。家畜・家禽では、このエネルギー摂取を人為的に制御することで成長や生殖機能の改善を図っています。そこで本研究ではエネルギー摂取と成長・生殖の関係を明らかにするために、食欲、成長・生殖を支配しているホルモンの相互作用を分子レベルで明らかにすることで、家畜・家禽の生産性の向上を目指します。

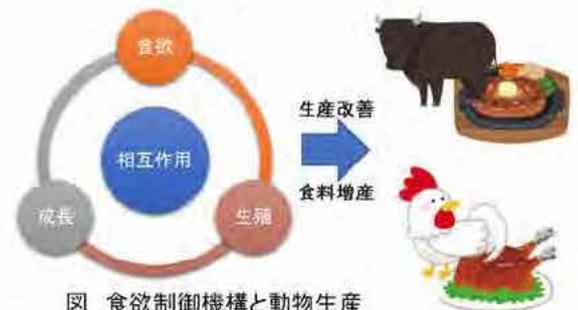


図 食欲制御機構と動物生産

主な所属学会: 日本家禽学会

金澤 卓弥(准教授)

Kanazawa Takuya, PhD

茨城大学農学部食生命科学科

農学部研究棟 619号室

takuya.kanazawa.omm(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8655 FAX: 029 (888) 8655

URL: http://square.umin.ac.jp/mammary/Mammary_Lactation/Top.html

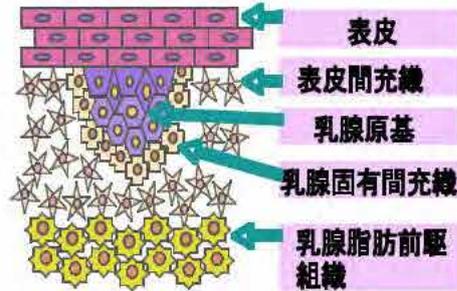


研究内容キーワード: 哺乳類細胞、乳腺、精巢、組織培養、家畜遺伝資源

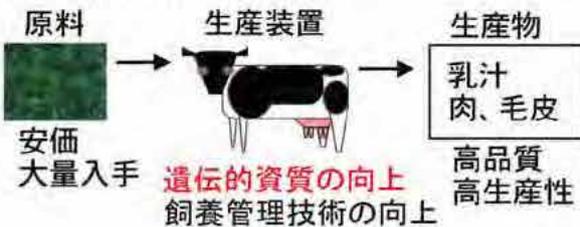
研究の概要

- 1) 乳腺の器官形成と細胞分化に関する研究
乳腺を構成する**上皮細胞**と**間質細胞**がどのように作用し合って乳腺が発達し、分化して乳汁分泌するのか、その仕組みを組織学、細胞工学、分子生物学の手法を用いて調べています。
- 2) 生殖細胞の減数分裂に関する研究
雄の生殖細胞の**精原細胞**(右図の赤色細胞)は、**体細胞分裂**によって数を増やした後、**減数分裂**を開始します。2種類の細胞分裂がどのような仕組みで調節されるか、幼若精巢の器官培養にホルモンなどを作用させた後、免疫染色法、遺伝子解析法を用いて調べています。
- 3) 在来家畜の遺伝子解析
消費者の嗜好や生産環境の変化に対応するために、家畜の生産性に関連する**遺伝資源**を世界中の在来種から探しています。

1) 乳腺の器官形成



3) 家畜の遺伝資源と生産性



所属学会・研究会: 日本畜産学会、日本動物学会、日本繁殖生物学会、乳腺・泌乳研究会(代表)

小針 大助(准教授)

Kohari Daisuke

国際フィールド農学センター

連絡先

iFC 205号室

daisuke.kohari.abw(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8705 FAX: 029 (888) 8705

URL: <http://dklabo.wixsite.com/mysite>



研究内容キーワード: 動物行動学、アニマルウェルフェア、ウシ、展示動物

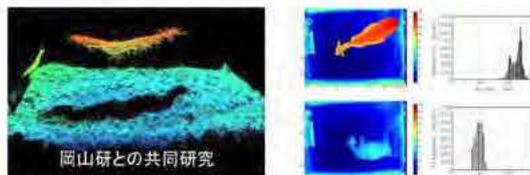
研究の概要

私達は、生産物を得るためだけでなく、教育や研究、環境保全やレクリエーションなど、様々な目的を持って動物の飼育・管理を行っています。したがって、そのような飼育下の動物のQOL(生活の質)の向上は、利用者である私達人間のQOLの向上にもつながる重要な要素です。

私達は、そのような**動物のストレス**や**問題行動の解決**、**飼育環境の快適性の向上**といった観点から、動物行動学の手法を用いて研究に取り組んでいます。私たちの研究室で扱っている研究対象の動物は、主に**大型家畜(牛)**と**展示動物(動物園動物)**です。

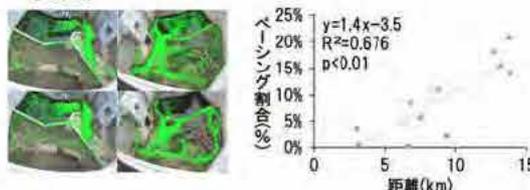
研究例①

赤外線深度センサーを用いた家畜牛の自動行動記録技術ならびに分娩予測技術の開発



研究例②

展示動物における運動要求量の解明と常同行動の制御



- ◆ 茨城大学研究推進プロジェクト (H28~H30)
- ◆ 茨城大学COC事業 地域課題解決型 特定研究プロジェクト (H27・H28)
- ◆ 茨城大学研究拠点形成事業 (H29~H31)



現在、日立市のかみね動物園との間で、動物園研究と教育に関する連携プロジェクトを進めております。HPにプロジェクト内容の詳細を掲載しておりますのでこちらをご覧ください。

茨城大・かみね動物園プロジェクトHP <http://dklabo.wix.com/zoorep>

主な所属学会: 日本畜産学会・応用動物行動学会・日本家畜管理学会

須藤 まどか(教授)

Sutoh Madoka

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 517号室

madoka.sutoh.catguardian(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8570



研究内容キーワード: 反芻家畜、ストレス、内分泌、代謝制御

研究の概要

主に血液中のホルモンを手がかりとして、家畜の受けるストレスが体内での栄養素代謝におよぼす影響とその調節のメカニズムを明らかにし、ストレスの少ない飼育環境の提案や、ストレス抵抗性の高い家畜の育種に役立てることを目指しています。

<具体的研究内容>

・暗期中断による成長ホルモン分泌抑制に関する研究

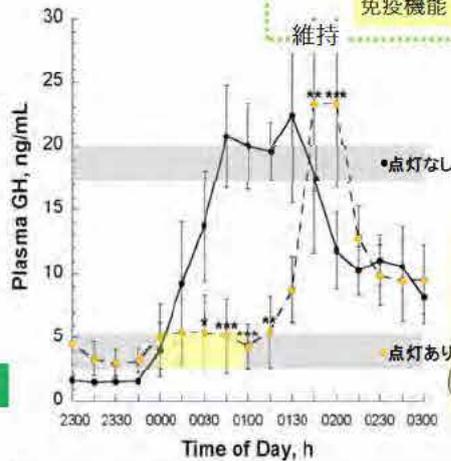
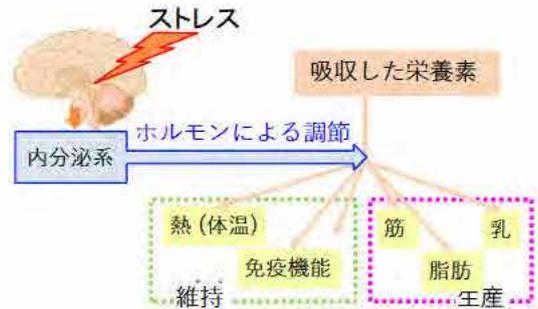
夜間の照明点灯が子牛の成長ホルモン分泌を抑制すること(右図)を明らかにしました。現在は、この現象のメカニズムを明らかにするための研究をしています。

・ストレス反応としてのプロラクチン分泌に関する研究

乳の合成・分泌を司るホルモンとして知られているプロラクチンは、雌雄ともにストレスによって分泌が増加します。この反応の生理的な役割を調べる研究を始めました。

【農研機構(NARO)畜産研究部門と共同で研究を行っています】

主な所属学会: 日本畜産学会



中島 弘美(教授)

Hiromi Nakajima

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 528号室

hiromi.nakajima.vmd@vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8573 FAX: 029 (888) 8573



研究内容キーワード: 骨、靭帯・腱、軟骨層

研究の概要

当研究室では、健康な動物や病気になった動物の構造と機能について、形態学的立場から肉眼で、次いで光学顕微鏡で、さらに電子顕微鏡で観察をする研究を行っています。

おもな研究テーマ

① 動物を用いた靭帯・靭帯付着部軟骨層の形態学的及び機能的な研究

② 採卵鶏のCa代謝に関わる副甲状腺・上皮小体の形態学的及び機能的な研究

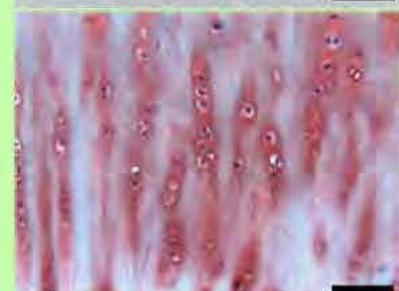
特に、膝関節において、骨への前十字靭帯付着部軟骨層について研究を続けており、この付着部軟骨層は過負荷になると広くなり、除負荷になると狭くなること解ってきました。

主な所属学会: 日本獣医学会、日本家畜衛生学会

膝前十字靭帯除負荷後の付着部軟骨層におけるアポトーシスの出現とグリコサミノグリカンの減少



除負荷後1週間 TUNEL染色 矢印はアポトーシス軟骨細胞



除負荷後1週間 サフランインO染色 赤色部はグリコサミノグリカン

安江 健(教授)

Yasue Takeshi

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 516号室

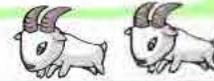
takeshi.yasue.animal(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8576

FAX: 029 (888) 8576



研究内容キーワード: 動物生産、放牧システム、動物行動、飼育管理



研究の概要

応用動物(つまり家畜)の行動を研究するとともに、動物の行動を動物自身や人の生活に役立てる(つまり応用する)ための飼育方に関する教育・研究を行っています。最近は主に以下の3テーマに取り組んでいます。

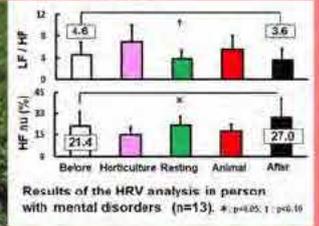
ヤギの食草行動をフル活用した耕作放棄地再生手法の確立に関する研究



スキヤクズに覆われた耕作放棄地(左)も、ヤギの食草行動を活用することで、わずか1年で見通しの良い草地(右)に変えることができます。そのための最適な飼育方式を研究しています。

所属学会: 日本畜産学会、日本家畜管理学会、応用動物行動学会

動物とのふれあいがヒトの心理的・生理的状态に及ぼす効果に関する研究



家畜と「ふれあう」ことの効果を、心理的・生理的指標を用いて研究しています。家畜の食料生産以外の活用を探索する研究です。

ヤギが好んで使用する2階建て休息舎の快適性の向上



高い所での休息を好むヤギの場合、2階建ての休息舎を設置すれば広い放牧地でも8割近くの糞尿を肥料として簡便に集めることができます。劣位個体も同時に利用できる快適な2階建て休息舎の開発を目指します。

バイオテクノロジー

朝山 宗彦(教授)

Asayama Munehiko

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 611号室

munehiko.asayama.777(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8651

URL: <http://asam.agr.ibaraki.ac.jp/>

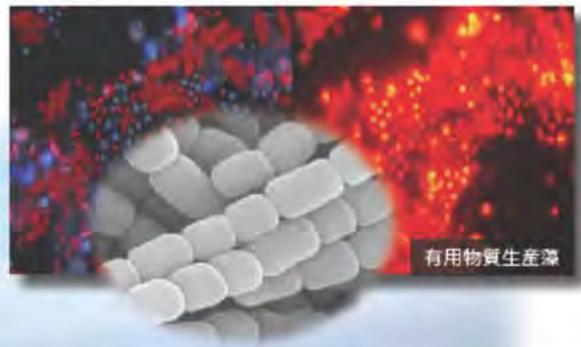


研究内容キーワード: 光合成生物、遺伝子、有用物質生産

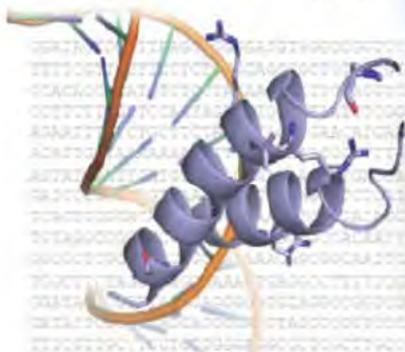
藻に関する基礎・応用研究をしています

- ・光合成効率を高めるスイッチ遺伝子の解析
- ・水辺から有用新種藻の単離
- ・有用藻のゲノム遺伝子解読と機能解明
- ・高密度藻細胞培養装置の開発
- ・排気CO₂ガス再利用資源化に関する研究

研究室ホームページ <http://asam.agr.ibaraki.ac.jp/>



有用物質生産藻



遺伝子発現制御からバイオ燃料生産まで



農ヶ浦風景



藻細胞培養液

中平 洋一(准教授)

Nakahira Yoichi

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 610号室

yoichi.nakahira.41(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8652 FAX: 029 (888) 8652



研究内容キーワード: 葉緑体、遺伝子工学、食べるワクチン、バイオ燃料

研究の概要

葉緑体工学を用いた有用遺伝子組換え植物の開発

植物の葉緑体には独自のDNAが存在しています。我々の研究グループでは、葉緑体DNAへの遺伝子導入技術(葉緑体工学)を活用することで、**食糧・医療・エネルギー等、人間の生活の様々なシーンで役立つ遺伝子組換え植物**の開発を進めています。また、葉緑体工学の技術向上のために、葉緑体遺伝子の機能や遺伝子発現制御に関する研究も行っています。



主な所属学会: 日本植物生理学会

久留主泰朗(教授)

Kurusu Yasurou

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 513号室、505号室、512号室

yasurou.kurusu.krsy(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8646



研究内容キーワード: 正確な遺伝システム、遺伝子修復、プラスミド、遺伝子操作

研究の概要

生物は、親の遺伝子を**正確**に子へ受け継がせる**遺伝システム**を持ち、
1) **遺伝子に起きた突然変異(塩基置換など)を正確に修復する機構**、
2) **親細胞から娘細胞に遺伝子を正確に分配する機構**、は特に重要です。

- 生物の多くは生存に酸素を必要とします。しかしながら、呼吸による酸素代謝で、酸素(O₂)から**活性酸素**としてO₂・H₂O₂・**・OH**等が生じ、その中でも**・OH(ヒドロキシラジカル)**は酸化反応性が最も高く、細胞内の脂質、蛋白質、DNAをターゲットとして酸化損傷させる**活性酸素**です。当研究室では、**deoxyGuanine**の酸化により生成し、**突然変異**を引き起こす原因となる**8-OH-dG**(図1)の生成と防御の解明に取り組んでいます。
- 遺伝子には**プラスミド**と呼ばれる小さな環状DNA分子があります。当研究室では、**プラスミド**の安定分配機構の解明に取り組んでいます。**プラスミド**は、遺伝子操作において有用遺伝子の運び屋として広く使われています。本研究で、細胞内に安定に保持される**プラスミド**が構築され、遺伝子組換え生物の安定的な大量培養が可能となり、有用遺伝子産物(蛋白質)の生産性の向上につながると期待されます(図2)。

図1. deoxyGuanineの酸化反応

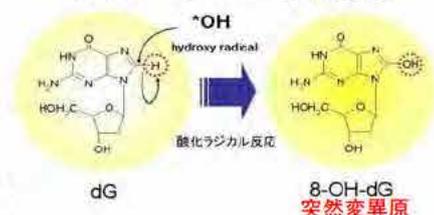


図2. プラスミドの安定分配



主な所属学会: 日本農芸化学会、日本ゲノム微生物学会、アメリカ微生物学会

西原 宏史(教授)

Nishihara Hirofumi

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 307号室

hirofumi.nishihara.agr(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8685 FAX: 029 (888) 8685

URL: https://info.ibaraki.ac.jp/Profiles/4/0000335/profile.html



キーワード: 水素酸化細菌、ヒドロゲナーゼ、水素、燃料電池触媒、炭酸固定

研究の概要

◆水素酸化細菌による炭酸ガスの有用資源化

水素酸化細菌は水素を酸化してエネルギーを獲得し、炭酸固定を行って増殖できる微生物です。独立栄養生物の中で卓越した増殖速度を誇るこの微生物を利用して、炭酸ガスの有用資源化等にご貢献することを目指します。

◆水素酸化酵素ヒドロゲナーゼの解析と利用

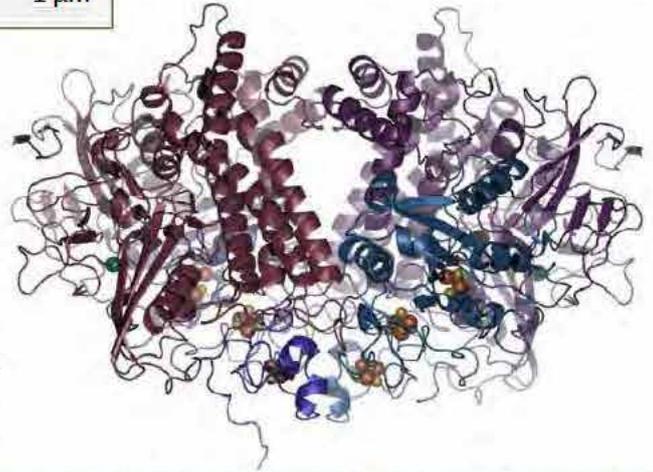
水素酸化細菌のヒドロゲナーゼは水素の分解と合成を行う酵素で、水素燃料電池で使われる希少金属の白金触媒と同じ働きをすることができます。また、光化学反応と組み合わせると、光エネルギーの水素への変換が可能になります。

触媒活性や安定性に優れた本酵素を探索し、その優れた仕組みを解明することで、ヒドロゲナーゼの改良や優れた人工酵素の開発にご貢献することを目指します。

主な所属学会: 日本生物工学会



海水から分離した水素酸化細菌(左)と、ここから発見された酸化による劣化に強い酸素耐性型ヒドロゲナーゼの構造(下)



多くのヒドロゲナーゼは酸素がある環境では酸化によって活性が失われるため、酸素耐性型ヒドロゲナーゼの発見とその酸化防御機構の解明は、実用に向けた重要な知見になります。

長南 茂(教授)

Chohnan Shigeru

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 309号室

shigeru.chohnan.arg(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8672 FAX: 029 (888) 8672



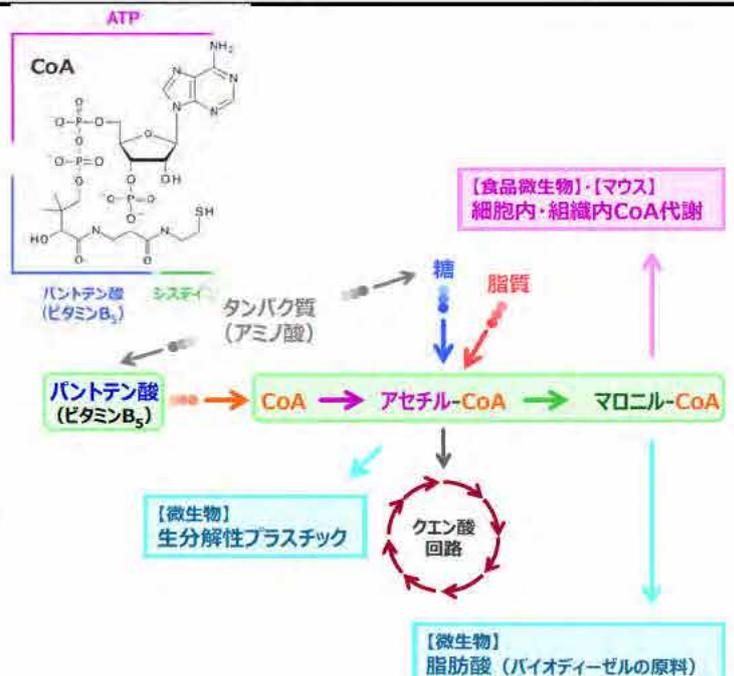
研究内容キーワード: コエンザイムA、パントテン酸、細胞内代謝、酵素

研究の概要

コエンザイムA(CoA)は全生物に共通して存在する分子で、**炭素の運び屋**として機能しています(右図)。生体内物質に炭素を付加し、より大きな分子を合成する反応や、大きな分子をより小さな分子に分解する反応に使われる**補酵素**です。

本研究室では、CoA合成経路の調節機構を明らかにすることを目的として鍵酵素である**パントテン酸キナーゼ(CoaA)**を解析しています。また、生合成されたCoAが細胞内でどのような挙動を示すかも、微生物やラット、マウスを用いて解析しています。前者の**CoA合成経路の調節機構の解析**では、真正細菌のCoaAには経路の最終生産物であるCoAで阻害されるもの、されないものの3種が存在することを明らかにしました。現在、これらCoaAの性質をつかって、細胞内の炭素の運び屋の濃度を上げることによる有用物質の生産性向上を目指した応用研究を展開しています(右図:**コファクターエンジニアリング**)。後者のラットおよびマウスの**細胞内CoAレベルの動態解析**では、脳・視床下部においては**マロニル-CoA**は脂肪酸合成の原料としての役割だけでなく、**摂食行動**、すなわち**食欲を調節する仲介分子**であることをつきとめました。

主な所属学会: 日本農芸化学会、日本生物工学会、American Society for Microbiology



小島 俊雄(准教授)

Kojima Toshio

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 407/409号室

toshio.kojima.1(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL/FAX: 029 (888) 8673



研究内容キーワード: 植物科学、ダイズ、環境ストレス、遺伝子、タンパク質

研究の概要

ダイズにおける塩ストレス応答機構の解明と耐塩性作物の開発

地中に根を深く張って生活する植物は、私たち人間とは異なり、一年のなかで、一日のなかで変化する自然環境から逃れることができません。植物は環境の変化に対して見た目に大きく変わらないため、一見鈍感なように見えますが、細胞の中ではわずかな環境の変化を認識し、優れた環境応答力・ストレス耐性能力を発揮しています。

私たちの研究室では、植物がもつ環境ストレスに対する応答機構・耐性システムを分子レベルで理解しながら、ストレス耐性作物の開発に利用できる有用な遺伝子資源の同定を目指しています。現在、乾燥・半乾燥地域を中心に拡大傾向にある塩類集積土壌を修復し、周辺諸国の持続的農業の発展に貢献できる耐塩性に優れたダイズ品種の開発に取り組んでいます。

主な所属学会: 日本農芸化学会、日本植物細胞分子生物学会など



遺伝子の機能解析を通じた有用遺伝子資源の探索

遺伝子組換え ↓ 交配育種

耐塩性ダイズの開発

安西 弘行(教授)

Anzai Hiroyuki

遺伝子実験施設

連絡先

遺伝子実験施設 405号室

hiroyuki.anzai.grc(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8742

URL: <http://grc.agr.ibaraki.ac.jp/>



研究内容キーワード: 接ぎ木、植物、遺伝子工学、エピジェネティクス

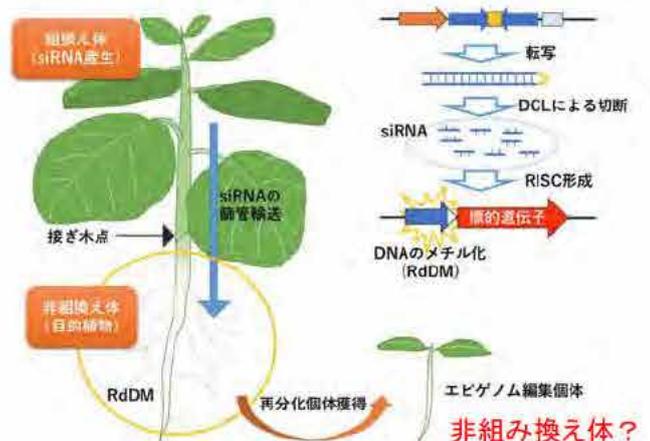
研究の概要

接ぎ木を介した植物の分子育種に関する研究

近年、DNAや核タンパクの修飾によるエピゲノム編集は植物育種で注目され、接ぎ木を介して輸送される小RNAが遺伝子抑制を起こす事が報告されています。私たちは種間、属間、科間の接ぎ木を介したこの現象の検証と発現抑制による新品種育成の研究をしています。(弘前大学共同) また、この過程において、ゲノム編集をはじめとする他の技術とも比較検証しながら、これらと組み合わせる等、より効率的な植物育種を目指しています。

さらに、接ぎ木技術そのものにも着目し、そのメカニズムや広範囲な植物種間での親和性を検討し、有用あるいは興味深い植物育成を試みています。

主な所属学会: 日本分子生物学会、日本育種学会、日本農芸化学会



トマトとジャガイモの接ぎ木植物 (TomTato) 英国で販売 £9.99 by Thompson&Morgan社

微生物の利用と制御

成澤 才彦(教授)

Narisawa Kazuhiko

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 403号室

Kazuhiko.narisawa.kkm(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8667 FAX: 029 (888) 8667

URL: <http://kabi.agr.ibaraki.ac.jp>



研究内容キーワード: エンドファイト、DSE、内生バクテリア、共生

研究の概要

●どんな研究をしているの？

- ・泥炭地や塩害土壌の植生回復におけるDSEの利用
- ・DSEを用いた病気に強い美味しい作物の栽培
- ・DSEや他の菌類に内生するバクテリアの働きの解明

● DSE (Dark Septate Endophyte) って何？

主に森林土壌およびそこに自生している植物の根部に生息する菌類の総称です。条件が整うと、植物と共生します。植物の生育を助けたり、病害防除・環境ストレス耐性などを付与します。

菌糸に隔壁 (Septa) があり、暗色 (Dark) のコロニーを形成する植物内生菌 (Endophyte) ということでDSEと呼ばれています。



菌糸に着生するバクテリア

高温条件 (35°C) でのトマトの生育試験

DSEの菌糸の周りにバクテリアが付着しています。DSEとバクテリアの間には何らかの相互作用が働いています。

対照区のトマトは枯れていますがDSEを接種した区では枯れることなく生長しています。

植物の生長を手助けします！



主な所属学会: 日本微生物生態学会、日本土壌微生物学会、日本菌学会、植物病理学会

西澤 智康(准教授)

Nishizawa Tomoyasu

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 203・211号室

tomoyasu.nishizawa.agr(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8664 FAX: 029 (888) 8525

URL: http://geo.agr.ibaraki.ac.jp/



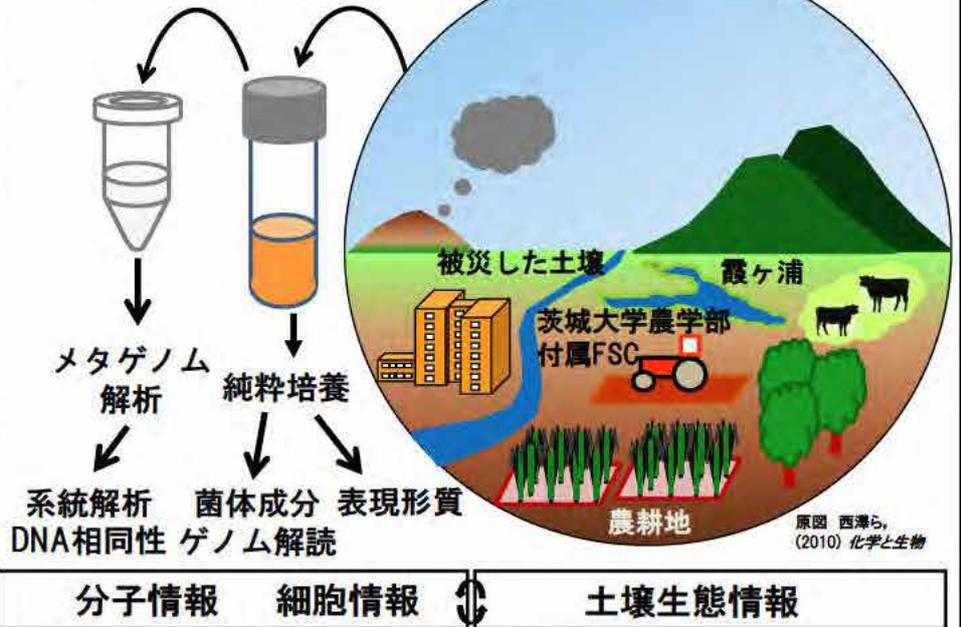
研究内容キーワード: 微生物間相互作用、土壌圏科学、ゲノム・遺伝情報解析

研究の概要

土壌(土壌団粒)は物質を貯蔵し、それらを利用する生物の住処を提供します。微生物は、土壌中の物質循環や環境調整の担い手であり、植物への栄養供給などにも深く関わっています。土壌微生物(群集)の活動が、植物の生育・成長と土壌生態系機能を結びつけています。

環境保全・食料生産・土壌生成に関わる微生物の分子生態学的研究に主として取り組み、ゲノム情報から土壌機能解明に向けたゲノム生態学的研究に注力しています。

DNA/RNA抽出 環境サンプル



原図 西澤ら, (2010) 化学と生物

主な所属学会: 日本土壌肥料学会、日本土壌微生物学会、日本微生物生態学会、American Society of Microbiology

古谷 綾子(助教)

Furutani Ayako

遺伝子実験施設

連絡先

遺伝子実験施設 406号室

ayako.furutani.asano(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8756

URL: http://grc.agr.ibaraki.ac.jp/ (施設HP)



研究内容キーワード: 植物病原細菌、病原性、生物的病害防除(バイオコントロール)

研究の概要

環境負荷の少ない方法で農作物を病害から保護するための技術開発を目指して、病原細菌がどのようにして植物に病気を引き起こすのか、また、化学合成農薬だけに頼らずに生物を利用して病害を抑える方法について研究しています。

【主な研究テーマ】

● 植物病原細菌の分泌機構に関する研究

細菌は自身の体内で作った物質を菌体外に分泌する装置を複数もっています。分泌される物質の中には細菌の病原性や他の微生物との生存競争に関わるものも含まれます。我々は、それらの分泌装置が作られる仕組みや分泌される物質の役割 などについての研究を行っています。

● 植物細菌病害の生物的防除に有用な微生物の探索

土壌や植物の葉面をはじめ、環境中には様々な微生物が生息しています。我々は、それらの中から生物的防除に有用な、様々な病原細菌に対する拮抗作用をもつ細菌を探索しています。



主な所属学会: 日本植物病理学会

中島 雅己(教授)

Nakajima Masami
茨城大学農学部地域総合農学科
(農業科学コース)

連絡先

農学部研究棟 429号室
masami.nakajima.pp(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8562 FAX: 029 (888) 8562

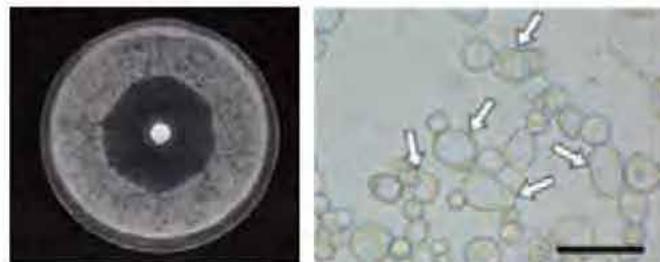


研究内容キーワード: 植物病原菌、病原性、生物的防除、抵抗性誘導

研究の概要 プロバイオティクスを用いた多機能型バイオコントロール技術の開発

年々増加の一途を辿る人口対策の一環として、食料増産と食の安心・安全の確保が叫ばれて久しく、その実現に向けたグリーン・イノベーションの一翼を担う農業技術の開発は人類が抱える直近の課題です。本研究では植物病害による収量損失率の持続的軽減化に力を置き、植物自身が誕生以来種々の環境ストレスとの対峙の中で獲得・進化してきた消エネ型生体防御機構を導く「プライミング」と人類の食生活を長年支えてきた有用な内在性微生物群「プロバイオティクス」との二つに焦点を当て、ヒトへの健康増進をも加味した安全性と低コストを実現する植物保護微生物剤の創出を目的とします。

主な所属学会: 日本植物病理学会



納豆菌を用いたカンキツ緑かび病菌の生育抑制効果
左図: 対峙培養による阻止帯形成
右図: 培養ろ液処理による菌体異常



納豆菌によるカンキツ緑かび病の抑制効果
左図: 納豆菌処理
右図: 滅菌水処理(対照区)

化学物質と生物制御

鈴木 義人(教授)

Suzuki Yoshihito

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 208号室

yoshihito.suzuki.chemeco(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8668 FAX: なし

URL: <http://chemicalecology.agr.ibaraki.ac.jp/>



研究内容キーワード: 植物ホルモン, 生理活性物質, 植物, 昆虫

ゴールとは

虫が住まい兼食料として植物に作り出す新しい組織が**ゴール(虫えい, 虫コブ)**です。アミノ酸の高蓄積や, 特殊な二次代謝物を多く含むという特徴があります。虫による刺激が植物の成長プログラムに働きかけて, 植物組織の成長を操作していると考えられますが, その刺激の本体は長年不明でした。



ハバチによるヤナギのゴール

ゴール形成昆虫は植物ホルモンを合成する

植物ホルモンは組織1g当たり1億分の1g以下の低濃度で植物の様々な成長をコントロールしています。我々の研究により, ゴール形成昆虫が, オーキシンやサイトカイニンといった植物ホルモンを自ら作ることが分かりました。これらのホルモンが異常な細胞分裂, 維管束の誘導, アミノ酸の蓄積等に関与すると考えられます。現在, これらのホルモンをどのようにして生産するのか, また, その生産能を進化の過程で如何に獲得したのかを研究しています。

主な所属学会: 日本農芸化学会, 植物化学調節学会

昆虫が植物に作るゴールの研究

植物における
有用物質生産

ゴール形成
機構の解明

重要害虫としての
ゴール形成昆虫駆
除技術の開発

新しい植物組織
培養技術

長谷川 守文(教授)

Hasegawa Morifumi

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 108号室

morifumi.hasegawa.1(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8660 FAX: 029 (888) 8525

URL: <http://seigyo.agr.ibaraki.ac.jp>



研究内容キーワード: イネ、いもち病、フィトアレキシン、天然物化学

研究の概要

ヒトのような高等動物は、病原体から身を守るために抗体や白血球などによる免疫システムを持っています。一方、植物は同様の免疫システムは持っていませんが、植物免疫とも呼ばれる巧妙な生体防御機能を持っています。その生体防御機構の一つがフィトアレキシンであり、これは病原菌感染時に新たに生合成される低分子抗菌活性物質で、植物が自分のために作る農薬のようなものです。

植物免疫が存在するにもかかわらず、植物に感染してしまう病原菌は存在します。このことから、植物病原菌は植物免疫をうまく回避する手段を持っていると考えられており、その回避機構の一つとしてフィトアレキシンの解毒が挙げられています。現在、私はイネのフィトアレキシンがイネの重要病原菌であるいもち病菌などによってどのように解毒代謝されているかについての研究を行なっています。

主な所属学会: 日本農芸化学会



イネの病原菌はフィトアレキシンであるサクラネチンを抗菌活性の低い化合物に変換する能力がある。

戸嶋 浩明(教授)

Toshima Hiroaki

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先

農学部研究棟 107号室

hiroaki.toshima.spb540(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8662

URL: <http://seigyo.agr.ibaraki.ac.jp/>



研究内容キーワード: KODA、化学合成、生理機能、花芽誘導、プローブ

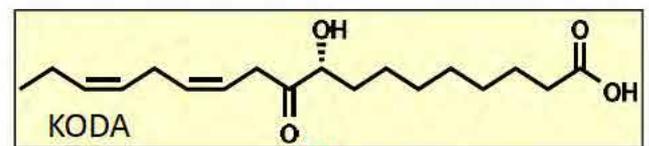
研究の概要

KODAによる植物の生理機能制御

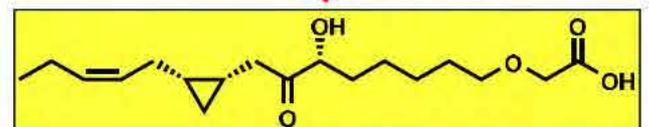
生物現象を分子レベルで解明するために、有機合成化学を駆使した化学的アプローチで研究しています。例えば、KODAは植物が生産する単純な構造の脂肪酸の一種ですが、花芽誘導活性をはじめとていくつかの植物ホルモン様の作用が知られています。

このような生物現象に関わる分子の構造を安定化した誘導体を合成し、農業生産等に役立つ化学調節剤等への応用を目指しています。さらに、化学構造を修飾することによりKODAが植物体内でどのように情報伝達し、どのような役目を担っているのかを解明することも目指しています。

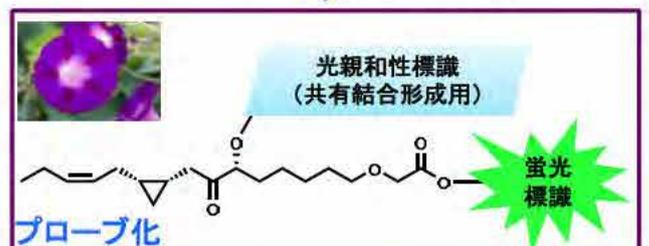
主な所属学会: 日本農芸化学会、日本農薬学会、日本化学会



安定化



機能解明



菊田 真吾(助教)

Kikuta Shingo
茨城大学農学部地域総合農学科
(農業科学コース)

連絡先
農学部研究棟 421号室
shingo.kikuta.pes(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL&FAX: 029 (888) 8561
URL: <https://researchmap.jp/Sincinq/>

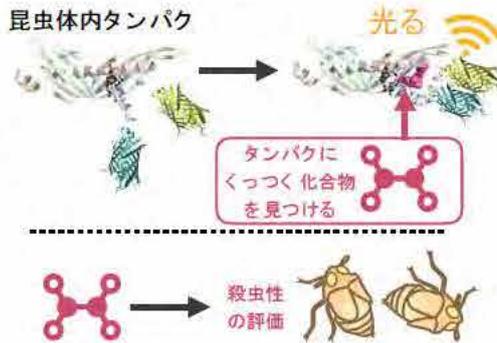


研究内容キーワード: 害虫防除、抵抗性、化合物スクリーニング、培養細胞

研究の概要

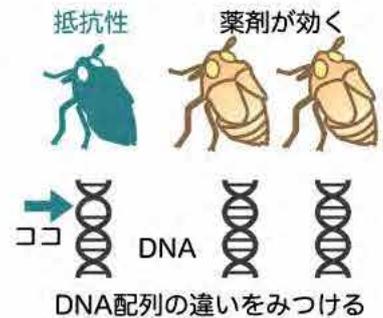
昆虫生理から新規薬剤候補の獲得をめざす研究

生体内の生理や代謝の働きを邪魔する化合物は、薬剤の候補となります。昆虫特有の体内のタンパクを標的とすれば、特定の害虫だけで活性を示し、ヒトや環境への影響を低く抑えることができると考えられます。そこで、昆虫の体内にあるタンパクの働きを高精度かつ簡便に検出する技術基盤を開発します。次に、公的化合物ライブラリーを用いて、昆虫に影響を及ぼす化合物の獲得を目指し、新しい薬剤の開発につなげます。



薬剤抵抗性の遺伝子診断技術の開発

害虫を防除するために、必要以上に農薬を使うと、薬剤が効きにくい昆虫が生き延びます。その理由の一つは、薬剤が効くポイントであるアミノ酸配列が他とは違うためです。アミノ酸は遺伝子情報としてDNAに記録されています。薬剤の効きやすさをたったひとつのDNA配列の違いから予測する遺伝子診断技術を構築します。殺虫剤が効きづらくなったことが早くわかれば、薬剤を変える指標となります。



主な所属学会: 日本応用動物昆虫学会、日本農芸化学会、日本農薬学会

北嶋 康樹(准教授)

Kitashima Yasuki
茨城大学農学部地域総合農学科
(農業科学コース)

連絡先
農学部研究棟 421号室
yasuki.kitashima.kanabun(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8559
URL: <http://entomology.agr.ibaraki.ac.jp/top.html>



研究内容キーワード: 食品害虫、防除、モニタリング、食の安全・安心

◆ 食品工場における害虫類のモニタリングシステムの開発

➤ 有機ELで害虫防除！タバコシバンムシのモニタリング用超小型ライトトラップの開発

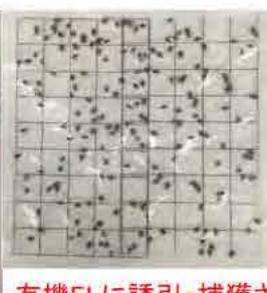
食品工場に発生するタバコシバンムシは、しばしば食品への異物混入を起こし、食の安全・安心を脅かす大害虫として知られています。食品工場では殺虫剤の使用が制限されるため、タバコシバンムシの防除には、定期的なモニタリングによる発生源の探知と清掃による発生源の除去が推奨されています。しかし、現在モニタリングに使用されているフェロモントラップはコストが高く、より安価なモニタリングツールの開発が望まれています。面照明で、厚さ2mmの有機ELは消費電力が少なく、様々な場所に設置できます。その光強度や色を制御することで、非常に効果的なライトトラップが作成できます。



タバコシバンムシ



面照明の有機EL



有機ELに誘引・捕獲されたタバコシバンムシ

主な所属学会:
日本応用動物昆虫学会、
日本ペストロジー学会



農業生産科学

佐藤 達雄(教授)

Sato Tatsuo

国際フィールド農学センター

連絡先

附属国際フィールド農学センター204号室

tatsuo.sato.strawberry(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8704 FAX: 029 (888) 8704

URL: <http://protech.agr.ibaraki.ac.jp/sub8.html>



研究内容キーワード: 持続的生産技術、ストレス、獲得抵抗性、キュウリ、イチゴ

研究の概要

食糧の安定的な確保を前提とした上で持続的な農業生産を推進するため、イチゴやキュウリなどの野菜を対象としています。

1. 熱ショックや紫外線などのストレスによる病害抵抗性誘導技術とその分子生物学的、植物生理学的見地からのメカニズム解明を目指しています。
2. リアルタイム生育診断とドリップチューブ等を用いた施肥量調節技術により、化学肥料施肥量の削減や増収を目指しています。



温湯散布装置による熱ショックでイチゴにうどんこ病に対する抵抗性を誘導する。



湯莓あみ



ドリップチューブによるキュウリの肥培管理
左:ドリップチューブ区、右:慣行施肥区

主な所属学会: 園芸学会、国際園芸学会、日本熱帯農業学会、日本農作業学会

望月 佑哉(助教)

Mochizuki Yuya

茨城大学農学部地域総合農学科
(農業科学コース)

連絡先

農学部研究棟 317号室
yuya.mochizuki.fuji(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8554 FAX: 029 (888) 8554



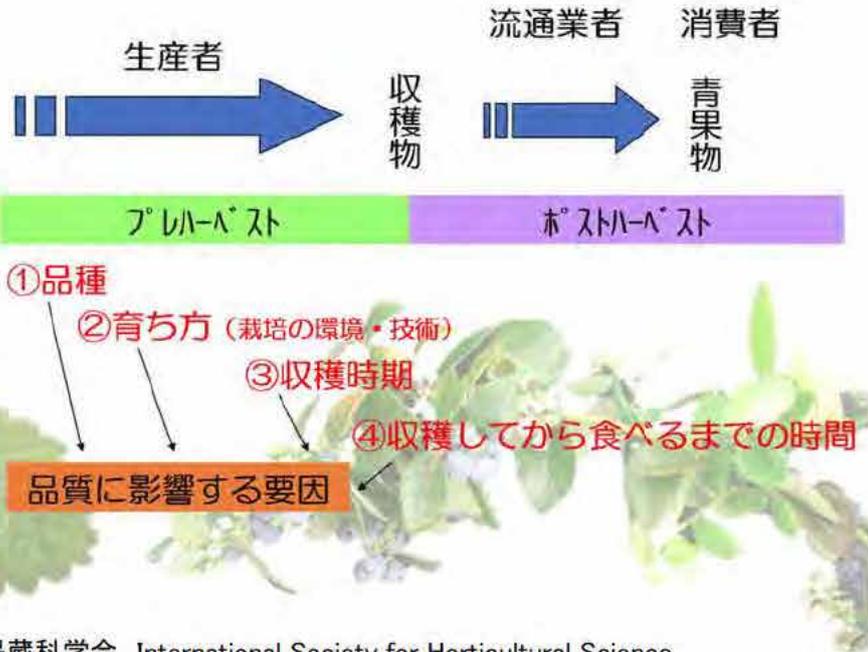
研究内容キーワード: 園芸作物、栽培学、施設園芸、鮮度保持、プレ・ポストハーベスト

研究内容

茨城県は農業生産額が日本で第2位であり、その内の約50%が園芸作物です。私は温室内で野菜などを栽培し、栽培技術や温室内の環境によって収穫後の品質や保存性にどのような影響が及ぼすか等について研究を行っています。

研究テーマ

- ・高品質で輸送性に優れたイチゴの品種特性の解明
- ・房取り収穫したブルーベリーの長期貯蔵法の開発



主な所属学会: 園芸学会、生物環境工学会、食品保蔵科学会、International Society for Horticultural Science

井上 栄一(教授)

Inoue Eiichi

茨城大学農学部地域総合農学科
(農業科学コース)

連絡先

農学部研究棟 316号室
eiichi.inoue.a@vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8553 FAX: 029 (888) 8553
URL: <http://fruit.agr.ibaraki.ac.jp>



研究内容キーワード: 園芸作物、野菜、果物、品質、生理、遺伝、健康機能性

研究の概要

園芸生産物(野菜や果物)の品質向上を目指して研究を展開しています。



新しい園芸品種をつくる!

品種改良を効率化するために、おいしい果実や野菜を見分ける方法を開発しています。

アセチル

アサシ

DNAマーカーによる梨の長実色の診断

おいしい園芸作物を生産する!

野菜や果実の品質が劣化する原因とその対策について研究しています。

収穫後レンコンの着色

果実の生理障害

梨の「みつ団」

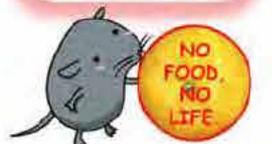
園芸作物を食べて健康になる!

果実や野菜に含まれる健康に良い成分の研究を行っています。

ブクレミカンの精製化特性

レンコンのポリフェノール量

地域特産作物のブランド力の強化を目指して、産地と連携して研究に取り組んでいます。野菜や果物の栽培や食に興味のある人を歓迎します!



主な所属学会: 園芸学会、International Society for Horticultural Science (ISHS)

田附 明夫(教授)

Akio Tazuke

茨城大学農学部地域総合農学科
(農業科学コース)

連絡先

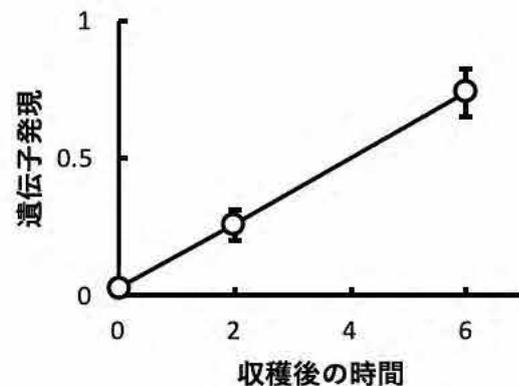
農学部研究棟 510号室
akio.tazuke.cuc(at)vc.ibaraki.ac.jpki.ac.jp
TEL&FAX: 029 (888) 8644
URL: <http://tazuke.agr.ibaraki.ac.jp>



研究内容キーワード: 野菜、ストレス、糖、遺伝子

研究の概要

植物は様々なストレスのもとで糖欠乏になります。キュウリなどのウリ科は果実の成長が急速なので、糖欠乏になりやすく、流れ果などにも糖欠乏が関係している可能性があります。組織の糖分析を行っても、植物細胞は糖を多く含む液胞があるので、細胞質の糖欠乏がわかりにくい場合が多いです。そこで、糖欠乏で誘導される遺伝子を探しています。これまでに見つかった*CsSEF1*という遺伝子は、糖欠乏で遺伝子発現が100倍にも高まります。図のように果実を収穫しただけでも遺伝子発現が高まります。この遺伝子の機能はよくわかっていないので、シロイヌナズナを用いた実験系などでこの遺伝子の機能を解析しています。



主な所属学会: 園芸学会、植物生理学会

久保山 勉(教授)

Kuboyama Tsutomu

茨城大学農学部地域総合農学科
(農業科学コース)

連絡先

農学部研究棟 509号室
tsutomu.kuboyama.a(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8643 FAX: 029 (888) 8643
URL: <http://ikushu.agr.ibaraki.ac.jp>



研究内容キーワード: DNAマーカー、QTL、交雑不親和性、雑種、花

研究の概要

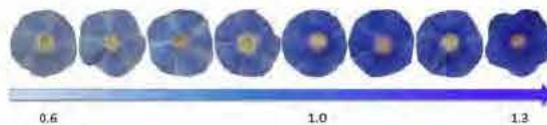
当研究室では様々なDNAマーカーを開発し、植物の品種改良に役立てる研究と、雑種形成の際に生じる様々な生命現象の解明と利用を目的とした研究に取り組んでいます。近年、塩基配列解読技術が進歩し、系統間での一塩基多型(SNP)が容易に検出できるようになっています。私達はSNPの情報を利用したマーカーを開発し、研究に活用しています。

研究テーマの例

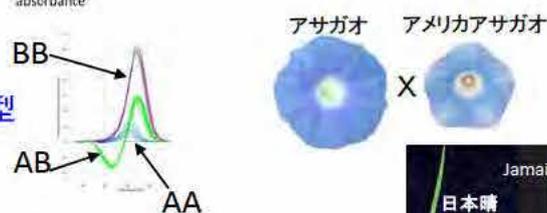
- ① イネ雑種における弱勢と強勢に関する研究
- ② アサガオの交雑不親和性に関する研究
- ③ レンコンの品種識別法の開発
- ④ イネの薬長を決める遺伝子の研究
- ⑤ アサガオの開花期や花色の濃さに関する研究

主な所属学会: 日本育種学会、遺伝学会、園芸学会、American Society of Plant Biologist

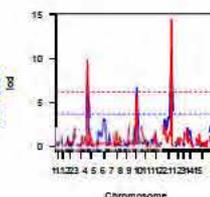
表現型



遺伝子型



原因遺伝子の探索



イネの雑種弱勢における根の異状

浅木 直美(准教授)

Asagi Naomi

茨城大学農学部地域総合農学科
(農業科学コース)

連絡先

農学部研究棟 315号室

naomi.asagi.h(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8552 FAX: 029 (888) 8552



研究内容キーワード: イネ、収量、品質、緑肥、¹⁵N

研究の概要

高収量を維持し環境への負荷を軽減できる**省資材で省力的な作物栽培技術の開発**を目指しています。

「水田や畑土壤に施用した有機質資材に含まれる窒素養分の**土壤-微生物-作物間動態の解明**」

★¹⁵Nトレーサー法を利用して、肥料由来窒素が作物に吸収される割合や土壤に残存する割合などを推定し、収量や品質との関係性を検討しています(図1)。

「**耕起条件や水管理方法などが作物の生育、収量および品質におよぼす影響の解析**」

★散水による**気化熱の効果で稲体周囲の気温を低下させ、登熟期の高温障害の軽減が期待されます**。スプリンクラーによる散水が玄米品質におよぼす影響を検討しています(図2)。

主な所属学会: 日本作物学会

★最適な緑肥の施用方法とは?

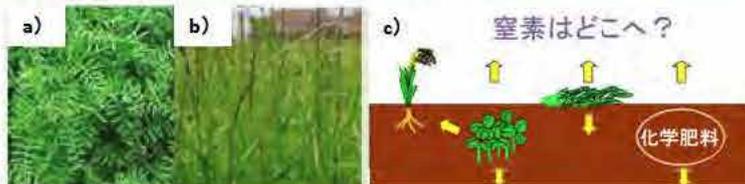


図1 緑肥作物と水田土壤に施用した緑肥・化学肥料由来窒素のゆくえ a) ヘアリーベッチ, b) イタリアンライグラス, c) 肥料由来窒素のゆくえ

★温暖化など環境変化に対応できる栽培方法とは?

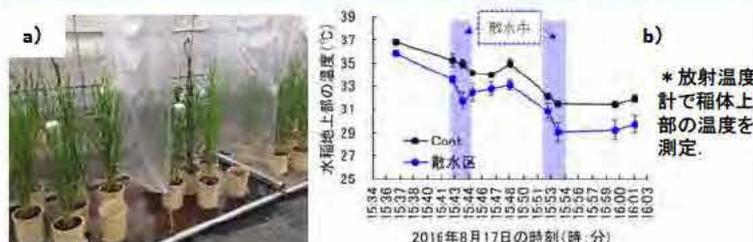


図2 スプリンクラーによる稲体周囲への散水実験

a) 散水の様子, b) 水稲地上部の温度の推移

七夕 小百合(准教授)

Tanabata Sayuri

国際フィールド農学センター

連絡先

農学部附属国際フィールド農学センター 206号室

sayuri.tanabata.i(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029(888)8706

URL: <http://protech.agr.ibaraki.ac.jp/sub8.html>



研究内容キーワード: 資源循環型生産技術、マメ科植物、根粒

研究の概要

1. 地域内資源循環型生産技術の開発

地域内の有機廃棄物などを農業生産に活用し、化学肥料の使用量を削減する方法について研究しています。

2. マメ科植物の根粒窒素固定に関する研究

マメ科植物は根に根粒菌が感染すると根粒を形成します。植物は、根粒の過剰着生を制御する機構を有します。この機構のメカニズムの解明を目的とし、研究を進めています。また、根粒の共生窒素固定能を農業生産に活用する方法について研究をしています。

主な所属学会: 日本土壌肥料学会、根研究学会



根粒の着生形態の比較
左: 通常のサイズ
右: 根粒を多数着生する変異体

小松崎将一 (教授)

Komatsuzaki Masakazu

国際フィールド農学センター

連絡先

国際フィールド農学センター 2階
masakazu.komatsuzaki.fsc(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8707 FAX: 029 (888) 8707



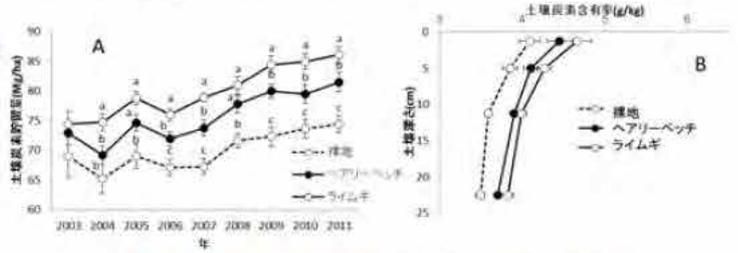
研究内容キーワード: カバークロップ・不耕起・有機農業・コンポスト・園芸療法

研究の概要

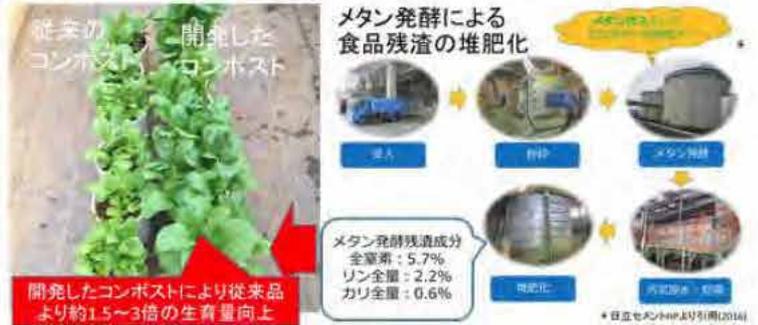
農耕地の持続的利用にむけた耕地生態系の最適管理システムについて、その管理手法の開発と評価を主なテーマとしています。現在、耕うん方法とカバークロップ作付との組み合わせによる耕地内循環システムの研究を行っています。また、有機農産物の生産について、カバークロップ、米ぬかなどの有機物を活用した有機栽培体系の確立に関する研究も実施しています。

さらに、地域における有機農業を推進するために生態系と調和した農業を地域コミュニティに適用する園芸療法の取り組みを行っています。

冬作カバークロップの作付の有無と土壤炭素貯留の経年的変化(A)および土壤炭素分布の差異(B)
Higashi et al, Soil & tillage Research, 2014



食品残渣の再資源化に関する産学連携の取り組み



主な所属学会: 日本農作業学会、日本有機農業学会、American Society of Soil & Water Conservation

黒田 久雄(教授)

Kuroda Hisao

茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

農学部研究棟 232号室

hisao.kuroda.agr(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8602 FAX: 029 (888) 8525

URL: http://mizu.agr.ibaraki.ac.jp



研究内容キーワード: 窒素、窒素循環、窒素浄化、里山

研究の概要

地球の限界(プラネタリー・バウンダリー)では、人間活動が地球に及ぼす影響として、9つの変化をあげています。一般に最も有名な地球環境問題は気候変動(温暖化)ですが、プラネタリー・バウンダリーによれば、生物の絶滅の速度が最もリスクが高く、次いで窒素循環となっています。そこで私の研究は、

- ①農地の窒素循環の解明
- ②水田・湿地の窒素除去機構の解明
をメインに、サブとして
- ③里山の健全性とは?
の研究を行っています。

主な所属学会: 日本土壤肥料学会、農業農村工学会他



畑地下層の窒素ボーリング調査



窒素浄化試験区



里山の健全性とは?

吉田 貢士(准教授)

Yoshida Koshi

茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

農学部研究棟 233号室

koshi.yoshida.agri(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8600 FAX: 029 (888) 8600

URL: http://mizu.agr.ibaraki.ac.jp/index.html

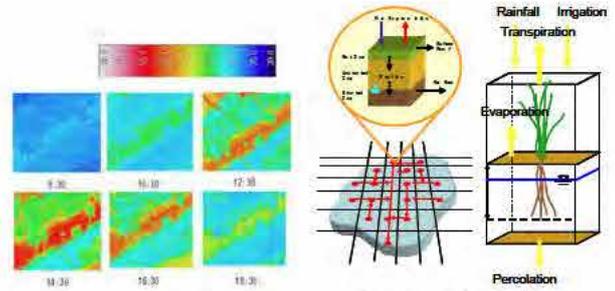


研究内容キーワード: 水環境の保全、作物生産に必要な水

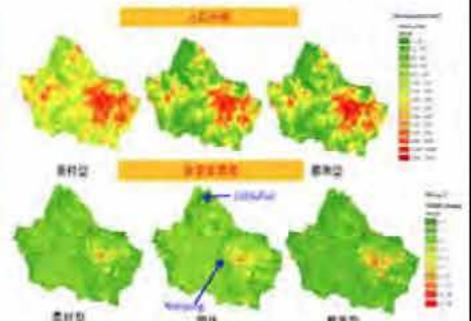
研究の概要

主に海外のフィールドを中心に以下のような研究を行っています。日本がかつて経験した高度成長に伴う環境問題が、まさに今、途上国で起きています。日本の経験と環境技術を現地の文化や生活スタイルに適した形で活用することにより、多くの問題が解決または緩和できます。是非、自分の目で見て、肌で感じてみて下さい。

- ・気候変動がアジアモンスーン地域の水質環境および物質循環に及ぼす影響の評価
- ・作物生産モデルを用いたメコン川流域における作物生産量および栄養塩吸収量の推定
- ・気象条件・水利用の変化がメガシティの地表面や植生温度に及ぼす影響の評価
- ・水田やため池が有する水環境保全機能の評価と流域レベルにおける寄与の推定



収量調査



人口(上)に対応した河川窒素濃度(下)

主な所属学会: 農業農村工学会、水文・水資源学会、土木学会、PAWEES、IAHS、ICID

前田 滋哉(准教授)

Maeda Shigeya
茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

農学部研究棟 231号室
shigeya.maeda.15(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8601



研究内容キーワード: 河川、農業水路、水理、生態、数値計算

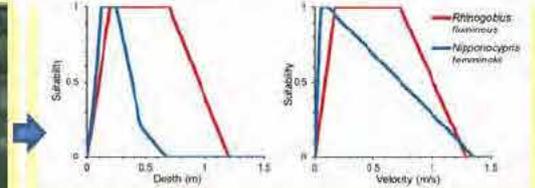
研究の概要

河川や農業水路を主な対象とし、水の流れ、水質、魚類等の観測やシミュレーションにより、**水環境の評価・予測・管理**の研究を行っている。具体的な研究テーマは以下のとおりである。

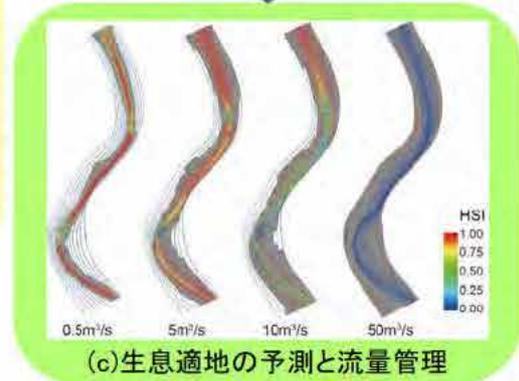
- 農業・発電用取水が河川の魚類生息環境に及ぼす影響の定量的評価(右図)
- 魚類の生息環境に配慮した施設の有効性評価
- 農業水路における環境配慮施設への堆砂のモデル化
- 北浦流入河川流域における全窒素流達負荷量の推定



(a)河川流の予測



(b)魚にとっての好ましさのモデル化



(c)生息適地の予測と流量管理

主な所属学会: 農業農村工学会、International Society of Paddy and Water Environment Engineering

毛利 栄征(教授)

Mohri Yoshiyuki
茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

農学部研究棟 228号室
yoshiyuki.mohri.office(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8598 FAX: 029 (888) 8000
URL: <http://geotech.agr.ibaraki.ac.jp/MohriLab/index.html>



研究内容キーワード: 地盤工学、農業土木学、地震と豪雨災害、減災技術

研究の概要

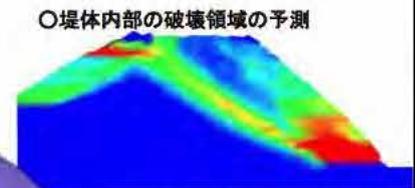
物質動態研究室では、ため池やダムなどの堤の現地調査・実験とともに、研究棟での模型実験とコンピュータシミュレーションを実施して、大規模地震や集中豪雨による災害に強い新しい構造の農業土木施設の研究・技術開発を進めています。これらの成果を基に、被災した施設の現地調査や対策委員会では、原因究明と復旧方法を国や自治体に提案しています。

◆ 研究タイトル

- ため池の耐震設計と高耐久化技術の開発
- 大規模地中パイプラインの耐震化技術の開発
- 土や地盤の破壊現象解明と予測技術の開発
- 地盤の革新的高耐久化技術の開発



●決壊ため池の現地試験



○堤体内部の破壊領域の予測

●コンピュータシミュレーション

地震や豪雨でも崩壊しない全く新しい構造の高耐久のため池を研究しています。



●100kgの特殊大型土のうを用いた高耐久ため池の三次元震動振動実験



●特殊土裏ため池の実証試験

主な所属学会: 農業農村工学会、地盤工学会、国際ジオシンセティックス学会

西脇 淳子(助教)

Nishiwaki Junko

茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先 農学部研究棟 229号室
Junko.nishiwaki.office(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8591 FAX: 029 (888) 8591
URL:
http://soilphys.agr.ibaraki.ac.jp/index.html



研究内容キーワード: 土壌、環境、化学物質、物質動態

研究の概要

・土壌中での水・ガス・化学物質の動態に関する研究

農地土壌中には水やガス、養分や化学物質などが存在しています。水の動きは作物栽培に、余剰養分や化学物質の動きは環境汚染に、二酸化炭素などのガスの動きは温暖化に影響するため、これら物質の動きを把握することは、農業および環境の面から重要です。これらの動きは、土壌の硬さや土粒子の大きさ、土壌pHなど、土壌の物理・化学的な性質に影響を受けます。

土壌の物理・化学的な性質を調べることで、作物栽培に適した土壌環境を整えとともに、現在起こっている土壌汚染や温暖化などの問題に対する解決方法を探る研究をしています。

主な所属学会: 土壌物理学会、農業農村工学会、Soil Science Society of America



土壌中の水の流れを知る

・作物栽培に適した土壌環境の維持
・農地環境問題の解決

土壌の物理・化学性と物質動態の関係を把握



土壌中ガスの動きを知る



土壌の物理・化学性を知る

坂上 伸生(准教授)

Sakagami Nobuo

茨城大学農学部食生命科学科

連絡先
農学部研究棟 313号室
nobuo.sakagami.soil(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8688 FAX: 029 (888) 8525
URL: http://ddp.agr.ibaraki.ac.jp/



研究内容キーワード: 環境動態, 土壌生態, 物質循環, 持続可能性, 熱帯農業, 国際連携

研究の概要

農業生産の基盤であり、物質循環の核となる“土壌”の視点を活かしながら、土壌、微生物、植物、そして動物(人間を含む)の連環に着目して、人間と自然の共生システムに関する多様な研究の展開を目指しています。

①土壌生態系をとりまく自然環境の動態解析

- ・植生回復や環境保全, 土壌生成過程の解明に関する研究
- ・環境中の無機物質循環と微生物作用に関する研究
- ・外生菌根菌が形成した菌核の分布や生態に関する研究

②土壌の持続的利用や農業の持続可能性

- ・有機農業の実践と物質循環(炭素蓄積や無機元素の動態など)との関係に関する研究
- ・熱帯地域における有機農業の実践に関する研究

③国際連携に関する教育研究

- ・国際機関における国際プロジェクトや高等教育機関における国際プログラムに関することなど



(例)福島県・駒止湿原における植生回復と土壌生成との関係についての研究概念図

主な所属学会: 日本地理学会, 日本土壌微生物学会, 日本熱帯農業学会, 日本土壌肥料学会, Geochemical Society

農業情報科学

木下 嗣基(教授)

Kinoshita Tsuguki
茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

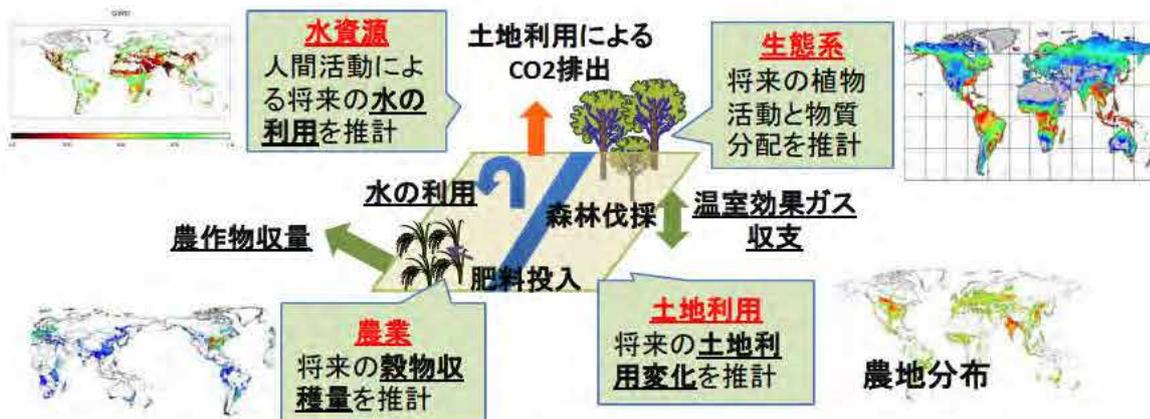
農学部研究棟 730号室
Tsuguki.kinoshita.00(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8635



研究内容キーワード: 土地利用、流体力学、リモートセンシング

研究の概要

地理と関連した研究を行っています。地図や地理情報システムと“なにか”を組み合わせた研究をしています。そのほかにも、流体力学などの研究を行っています。



研究テーマ

・全球土地利用の将来予測 ・流体相互干渉の解明 ・土地被覆図の作成

主な所属学会: 環境科学会、システム農学会

農業経済・地域創生

池田 真也(助教)

Ikeda Shinya
茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

農学部研究棟 729号室
shinya.ikeda.azabu(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8617



研究内容キーワード: アジア、開発、持続可能性、健康

研究の概要

1. インドネシアの農業発展

流通革命と呼ばれる小売業の変容が農産物市場の発展に及ぼす影響を実態調査と計量経済学を用いた実証分析で明らかにしています。

2. 途上国のインフォーマルな制度と契約

農村を訪れると、一見すると非合理に思われる制度や契約が多く観察されます。しかし、しっかり観察すると、実は合理的なものと、そうでないものが混在しています。その制度の在り様から経済発展を考察します。

3. アジアの健康

少子高齢化は日本だけの問題ではありません。健康であることが経済発展とその持続可能性にどのように影響するかを、実証的に明らかにしています。

主な所属学会: アジア政経学会、環境経済・政策学会、日本農業経済学会



インドネシア・ガルトの産地流通調査



インド・ムンバイの卸売市場調査

伊丹 一浩(教授)

Itami Kazuhiro

茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

農学部研究棟 723号室

kazuhiro.itami.ano(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8630 FAX: 029 (888) 8630

URL: <https://www.fb.com/itami.ibadai.agri/>



研究内容キーワード: 歴史、農業、環境、フランス、山岳地

研究の概要

フランス山岳地の農業・環境の歴史を分析

- ・堤防・灌漑組合の研究
- ・荒廃山岳地の植林・草地化の研究
- ・山岳地の生活型農業と酪農組合の研究

地域住民と環境との関わりを解明

地域資源の利用・管理・調整を分析

市場経済の競争と農業のあり方を追究

なぜ、歴史の研究か？

①現代社会の相対化

②現代の問題の発生・展開過程の分析

これにより、今後の農業や環境のあり方を模索

ひいては社会や経済のよりよいあり方を構築

主な所属学会: 日本農業史学会



レモンディエール用水路のトンネル
山岳地の植林の図面



エグリエの教会と集落



パポン用水路

内田 晋(准教授)

Uchida Susumu

茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

農学部研究棟 722号室

susumu.uchida.envr(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8632 FAX: 029 (888) 8632

URL: <http://env.agr.ibaraki.ac.jp/info/index.htm>



研究内容キーワード: 環境影響評価、ライフサイクルアセスメント、環境経済学

研究の概要

当研究室では、農業と環境・経済・持続可能性との関係を研究しています。

研究テーマ1: 農業生産についてのライフサイクルアセスメント

新しい農業技術の環境への影響を従来技術と比較したりする目的で、ライフサイクルアセスメント(原料の製造から製品の利用・廃棄まで、製品の生涯にわたる環境影響の評価方法)の手法を用いて、環境影響評価を行っています。

研究テーマ2: 環境影響や持続可能性を評価するための新しい方法の開発

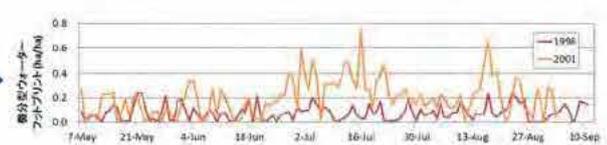
環境問題にもいろいろなものの見方があり、また、経済や社会など他の要因とも深くかかわっています。そうした影響を考慮した環境影響の評価方法や、環境負荷や持続可能性をわかりやすく表す指標について研究しています。



水利用を面積に換算



ライフサイクルアセスメントの例



水利用の新しい指標の開発

主な所属学会: 日本LCA学会、日本地域学会
日本環境共生学会

小林 久(教授)

Kobayashi Hisashi

茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

農学部研究棟 120号室
Hisashi.kobayashi.q(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8590 FAX: 029 (888) 8525
URL: http://chiiki.agr.ibaraki.ac.jp



研究内容キーワード: 自然エネルギー, 小水力, エネルギー自立, 参加型開発

研究の概要

農山村地域では、高齢化・人口流出等にともない地域資源管理や環境監視のノウハウ・知恵などの「地の知」の消滅危機にさらされています。適切な資源の利用・保全, 流域管理や防災などの観点から、とくに水源地域のコミュニティの維持・再生が喫緊の課題になっているといえるでしょう。

一方で、農山村地域は再生可能エネルギー(再エネ)資源が豊富であるため、将来のエネルギー需給システムを検討するうえで、重要な戦略地域と位置づけることが可能です。そこで、農山村地域がエネルギーシステム上の重要要素と位置づけられること、地域主導の再エネ開発がこれら地域の社会・経済に貢献する可能性があることを明らかにするとともに、小水力などの再エネ開発を起点とする地域づくりをテーマに研究を推進しています。

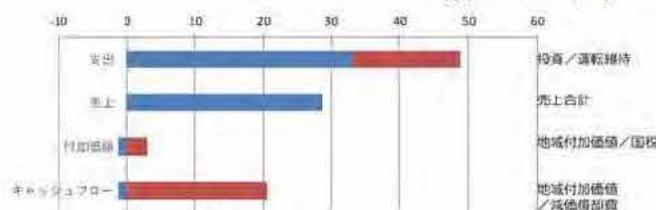
主な所属学会: 農村計画学会、農業農村工学会、エネルギー学会



コミュニティ小水力発電設備
(スコットランド)



各地の小水力開発を
調べています



村営小水力発電所の
地域付加価値分析 (単位: 百万円)

中川 光弘 (教授)

Nakagawa Mitsuhiro

茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

農学部研究棟 621室
mitsuhiro.nakagawa.prof(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8637



研究内容キーワード: 農業・農村開発、経営経済分析、食と健康、アグリセラピー

研究の概要

アジア農村の持続可能な農村開発を目指して、アジア各国からの留学生と日本人学生が共に学んでいます。

30名の研究室出身の博士を中心にアジア各国と研究ネットワークを形成し、様々な共同研究を行っています。

農村における再生可能エネルギー活用の一つとして、ソーラーシェアリング発電の評価を行っています。売電単価の引き下げ、ソーラーパネル単価の低下等の影響で10a当たり純収益は変化しますが、農業経営の安定化に役立っていることが分かりました。



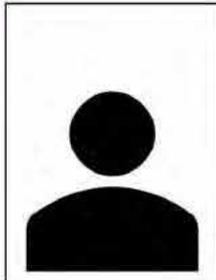
主な所属学会: 共生社会システム学会、日本農業経済学会

長澤 淳 (講師)

Nagasawa Jun 博士：経済学

連絡先

農学部研究棟 728号室



茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

研究内容キーワード：食、糧、数値モデル、シミュレーション

研究の概要

「食／糧を科学する」をテーマに食べ物について様々な視点から考えています。

- ・ 全球規模の穀物の生産／消費を経済モデルを用いて解析
世界の人が健康的な生活ができるようなシステムを作れるの？
- ・ 多くの宗教では、食べ物に対する戒律がある。食べ物のから宗教を見てみると何がみえてくるのか？
- ・ 効率化、省力化により機械化が進み、食糧を作るという作業自体が、工場での流れ作業のようになってしまっています。大変な作業をねぎらったり、多人数で行う作業で調子を合わせるために歌う、作業歌というものがあります。道具が歌いこまれていたり、どのような作業なのかが歌いこまれている歌が見受けられます。作業歌を分析することで、農業に今まで気がつかなかった価値を見出せないのだろうか？

西川 邦夫 (准教授)

Nishikawa Kunio

茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

農学部研究棟 724号室

kunio.nishikawa.agri(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8615 FAX: 029 (888) 8545

URL: <https://nishikawakunio920.jimdo.com/>



研究内容キーワード：農業政策、農業構造、農業経営、地域農業

1. 研究の概要

フィールドワークに基づき研究を進めています。

- (1) 農業政策の評価
- (2) 農業経営の経営分析
- (3) 地域農業の将来展望
- (4) 外国農業との比較

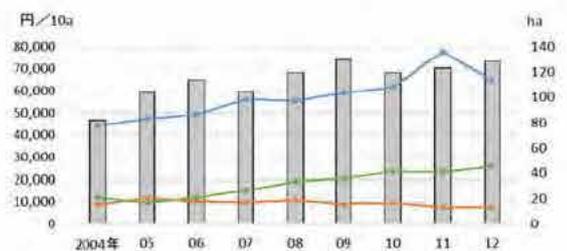
2. 研究の強み

現場で得られた知見とデータに立脚しているので、**現実から遊離しない**、地に足の着いた成果が得られます。また、研究に協力して頂ける方との**コミュニケーションを重視**して研究を進めていきます。

3. 対応できる依頼

- (1) 農業政策・地域農業戦略立案の基礎資料作成
- (2) 農業経営の定量的・定性的分析

主な所属学会：日本農業経済学会、農業問題研究学会、日本農業経営学会等



茨城県のある経営の規模と生産コストの推移。実際の農業経営は、規模を大きくするからコストが低下するという、単純な関係ではない。

海外でも基本はフィールドワーク



福与 徳文(教授)

FUKUYO Narufumi
地域計画研究室
Lab. of Regional Planning

連絡先

農学部研究棟 725号室
narufumi.fukuyo.agr(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8616



研究内容キーワード: 地域計画、住民参加、ワークショップ、資源管理

研究の概要

住民参加型の地域計画手法の開発

農村では、過疎・高齢化や混住化などによって地域社会の機能が低下し、耕作放棄地が増えたり、農業水路が十分に管理されなくなったり、様々な問題が生じています。こうした問題を住民自身が話し合って解決し、地域を活性化していくための計画手法を研究しています。



ワークショップを活用した住民参加型の地域づくり手法の開発



優良農地を保全し、耕作放棄地を再生するための土地利用計画手法の開発



都市住民やボランティアなどと連携した、多様な主体による地域資源管理システムの解明

主な所属学会: 農村計画学会、日本農業経済学会、農業農村工学会

牧山 正男(准教授)

Makiyama Masao
茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

農学部研究棟 227号室
masao.makiyama.0530(at)vc.ibaraki.ac.jp
TEL: 029 (888) 8597 FAX: 029 (888) 8525
URL: http://www.agr.ibaraki.ac.jp/assets/images/summary/pdf/local_02/15.pdf



研究内容キーワード: 中山間地域の活性化、滞在型市民農園(クラインガルテン)

研究の概要

- 過疎・高齢化が深刻な中山間地域の活性化を目指して、いくつかの研究を行っています。最近では農村移住・定住(田園回帰)に注目していますが、テーマとして長く関わっているのが、滞在型市民農園です。
- 滞在型市民農園とは、宿泊を許可された小屋が区画内に付設された市民農園のことで、クラインガルテン(Kleingarten, ドイツ語で小さな庭)とも呼ばれています。
- 比較的気軽に週末農業や二地域居住を体験できるこの施設は、都市農村交流や地元住民の雇用など、地域を元気にする効果が期待されます。しかし、地元の管理・運営体制の構築や、過剰供給、施設の老朽化への対応など、課題が多く残されています。最近では特に、持続的な住民組織のあり方に取り組んでいます。



(例)クラインガルテン曾爾(奈良県曾爾村)

- ◇ 2003(平成15)年開園
- ◇ 全30棟
- ◇ 年間利用料 52.5万円(入居時保証金5万円)
- ◇ 区画面積 200 m²
- ◇ ラウベ面積 43.2 m²

主な所属学会: 農村計画学会、農業農村工学会

高瀬 唯(助教)

Takase Yui

茨城大学農学部地域総合農学科
(地域共生コース)

連絡先

農学部研究棟 726号室

yui.takase.landscape(at)vc.ibaraki.ac.jp

TEL: 029 (888) 8631

URL: <https://yuitakase.wordpress.com>



研究内容キーワード: ランドスケープ、眺め、造園計画、風景、緑地マネジメントなど

研究の概要

景観研究を通じて、「人々が自然環境に親しむこと」と「未来に向けて豊かな自然環境と人々の暮らしの両方を持続していくこと」の両立についてどのように実現するかを紐解きます。

◆ 以下の問いに対する成果が期待できます

- 例1. 景観要素にてどのような整備や管理を施せば、人々に好まれる眺めや、各地域の文化や地理、自然環境と調和した眺めにしていけるのだろうか？
- 例2. 財政難や管理の担い手不足が進む中、どのような工夫や戦略を立てれば将来へ景観を維持していけるだろうか？
- 例3. 景観の客観性ある評価や予測を行うためには、どのような数値的・定量的な計測ができるのだろうか？

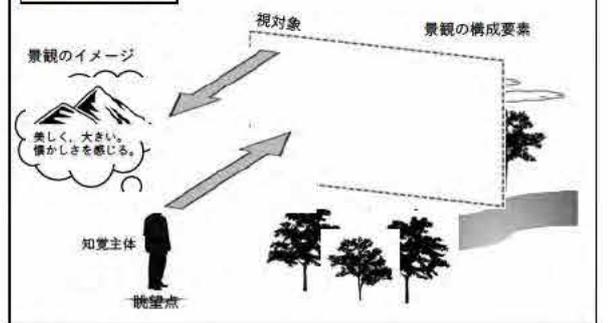
主な所属学会: 日本造園学会、日本建築学会、農村計画学会、
日本都市計画学会、Japan Geoscience Union



アンケート, GISとGPS,
テキスト分析, インタビュー
などを用いて分析



風景体験の様子



キーワード別索引

キーワード	ページ番号	キーワード	ページ番号
数字・アルファベット順		環境経済学	32
15N	23	ーストレス	13
Clostridium perfringens	5	ー動態	28
DNAマーカー	22	菊芋	2
DSE	14	機能性	4
KODA	18	共生	14
PCR	6	キュウリ	20
QTL	22	魚貝毒	2
50音順		果物	21
アグリセラピー	33	クロマトグラフィー	3
アジア	31	経営経済分析	33
アニマルウェルフェア	7	ゲノム・遺伝情報解析	15
イチゴ	20	健康	31
遺伝	21	ー機能性	21
ー子	10 13 22	減災技術	27
ー子工学	11 13	光合成生物	10
ー子修復	11	交雑不親和性	22
ー子操作	11	酵素	12
ー子発現	6	構造	3
イネ	18 23	行動	4
いもち病	18	コエンザイムA	12
ウェルシュ菌	5	国際連携	28
ウシ	7	昆虫	17
うつ病	4	コンポスト	24
栄養	4	根粒	23
エネルギー自立	33	サイトカイン	6
エピジェネティクス	13	栽培学	21
園芸作物	21	細胞内代謝	12
ー療法	24	作物生産に必要な水	26
エンドファイト	14	ー成長シミュレーション	30
害虫防除	19	雑種	22
開発	31	里山	26
化学合成	18	サポニン	2
ー物質	28	参加型開発	33
花芽誘導	18	山岳地	32
家禽生産	6	飼育管理	9
獲得抵抗性	20	資源管理	35
加工	4	資源循環型生産技術	23
化合物スクリーニング	19	地震と豪雨災害	27
河川	27	施設園芸	21
家畜遺伝資源	7	自然エネルギー	33
カバークロープ	24	持続可能性	28 31
環境	28 32	ー的生産技術	20
ー影響評価	32	実験動物	2
		地盤工学	27
		シミュレーション	34

キーワード別索引

キーワード	ページ番号	キーワード	ページ番号
住民参加	35	ダイズ	13
収量	23	多糖類	3
小水力	33	食べるワクチン	11
食	34	炭素固定	12
食中毒	2	タンパク質	13
一菌	2	地域計画	35
食と健康	33	一農業	34
食肉	4	地球温暖化影響・適応策評価	30
食の安全・安心	19	畜産物	4
食品害虫	19	窒素	26
一加工	3	一循環	26
一残留物質	3	一浄化	26
一分析	3	中山間地域の活性化	35
植物	13 17	腸内細菌叢	5
一科学	13	接ぎ木	13
一工場	25	抵抗性	19
一病原菌	16	一誘導	16
一病原細菌	15	展示動物	7
一ホルモン	17	天然物化学	18
飼料化	4	糖	22
靱帯・腱	8	糖脂質代謝	6
水素	12	動植物の3次元解析	25
一酸化細菌	12	動物行動	9
水理	27	一行動学	7
数値計算	27	一生産	9
数値モデル	34	土壌	28
ストレス	4 8 20 22	一圏科学	15
正確な遺伝システム	11	一生態	28
生活習慣病	2	土地利用	29
生殖	6	内生バクテリア	14
精巢	7	内分泌	8
生態	27	眺め	36
成長	6	軟骨層	8
生物的病害防除 (バイオコントロール)	15	乳化	3
一防除	16	乳腺	7
生理	21	熱帯農業	28
一活性成分	2	燃料電池触媒	12
一活性蛋白質	1	農業	32
一活性物質	17	一・農村開発	33
一機能	18	一経営	34
鮮度保持	21	一構造	34
造園計画	36	一水路	27
組織培養	7	一政策	34
滞在型市民農園 (クラインガルテン)	35	一土木学	27
代謝制御	8	バイオ燃料	11
大豆	2	培養細胞	19

キーワード別索引

キーワード	ページ番号
花	22
反芻家畜	8
パントテン酸	12
微生物間相互作用	15
ヒドロゲナーゼ	12
病原性	15 16
品質	21 23
フィトアレキシン	18
風景	36
不耕起	24
物質循環	28
-動態	28
プラスミド	11
フランス	32
プレ・ポストハーベスト	21
プローブ	18
プロテアーゼインヒビター	1
分散	3
分析精度管理	3
防除	19
放牧システム	9
保蔵	3
哺乳類細胞	7
骨	8
ホルモン	6
マウス	4
マメ科植物	23
水環境の保全	26
モニタリング	19
野菜	21 22
野鳥	5
有機農業	24
有用物質生産	10
葉緑体	11
ライフサイクルアセスメント	32
ランドスケープ	36
リモートセンシング	29
流体力学	29
糧	34
緑地マネジメント	36
緑肥	23
歴史	32
レクチン	1
ワークショップ	35

最新情報は農学部ホームページで 農学部フェイスブックページも更新中です。
 もご確認いただけます。



<http://www.agr.ibaraki.ac.jp/>



<https://www.facebook.com/ibadai.nougakubu/>



茨城大学阿見キャンパス（農学部・遺伝子実験施設）アクセス



土浦駅（西口）バスターミナル1番乗り場から
 関東鉄道バス「阿見中央公民館行」に乗車、「茨大前」下車。
 （バス乗車時間は約20分）

〒300-0393
 茨城県稲敷郡阿見町中央3-21-1
 TEL:029-887-1261
 FAX:028-888-8525

